御城跡遺跡

平成6年3月

宇都宮市教育委員会

序　文

本市の西部、宝木付近は江戸時代には西原と呼ばれ、田畑も疎らな広大な原野でした。江戸時代の末に始まる新田開発により西原も開発が行われ、各地から開墾のために多くの入植者がありました。その入植者の方々は10の集落に分かれていたため、当時この付近は西原新田十か村と呼ばれていました。本遺跡はその十か村の南端、六軒の集落と大谷街道を挟んで隣接する中丸という地区になります。

昭和58年刊行の「宇都宮の遺跡」では御城跡高塚群として登録されておりましたが、今回の調査により、縄文～弥生、平安時代の遺構が確認されたため、御城跡遺跡と改称いたしました。

開発が行われる以前のこの場所は篠竹が繁茂する藪であり、人が立ち入ることはあまりありませんでした。しかし、平成４年６月、この場所を住宅地として開発したい旨の照会が株式会社ユーエスケーよりありました。そこで協議を行った結果、この貴重な古代の人々が生活した跡を記録保存することとなり、当教育委員会が主体となって発掘調査を行いました。

本書は、今回の発掘調査をまとめたものであり、本地域の歴史や埋蔵文化財の理解を深めるための資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、本市文化財保護行政に深い御理解と御協力いただきました関係各位、関係機関並びに、発掘調査・整理作業に携わった方々に厚くお礼を申し上げます。

平成６年３月

宇都宮市教育委員会教育長

藤　田　昌　平

例　言

1　本書は宇都宮市駒生町字北原 848番地－1を代表地番とする宅地造成・開発に先立つ記録保存のための御城跡遺跡発掘調査報告書である。

2　試掘調査から報告書刊行に至るまで、株式会社ユーエスケーの依頼を受けて宇都宮市教育委員会が実施した。調査費用は株式会社ユーエスケーが負担した。

3　本遺跡の確認調査対象面積は約 9,851㎡であるが、試掘調査の結果より本調査対象面積は、約2,000㎡（高塚9基分は除く）である。
調査区は中央北寄りで東西に2軒並ぶ開発対象外の2軒の住宅を境に、北を北調査区（1号2号塚）、南を南調査区（その他全ての遺構）と呼称した。

4　調査・整理の期間は以下のとおりである。
試掘調査　　平成4年8月24日から同年8月25日まで。
発掘調査　　平成4年9月1日から同年11月9日まで。
整理作業　　平成5年4月12日から平成6年3月11日まで。

5　発掘調査から整理、報告書作成に至る過程で、次の方々、機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。（以下の氏名はすべて順不同、敬称略）
栃木県教育委員会、栃木県埋蔵文化財センター、株式会社ユーエスケー、興和産業株式会社、大川清、石部正志、上野修一、藤田典夫、今平昌子、天谷保一、清水豊

6　調査には定岡明義、梁木誠、神野安伸、今平利幸、大塚雅之があたった。
また発掘調査に参加いただいた調査作業員は次のとおり
阿久津フミ、増渕フミ、室井キン、黒川テル子、入江通子、入江タカ子、入江キイ、阿部ゆかり、鈴木貴、加藤文治、関谷広子、稲葉敏江、平野清美、真方厚子、鈴木千代子、水野三枝子、帯谷才子、石沢とみえ、池田トミ子、福田悦子、野尻トキ、
今井典子、

7　図面・遺物の整理、実測は大森八重子、大野節子、鈴木芳子、福田喜久栄、樋口静子、鈴木道子、賀来孝代、横堀聡、大沢順子、君島朱美、岡田由紀子の多大なる協力を得た。

8　本書執筆分担は以下のとおり　第１章，第２章，大塚雅之
第３章　第１節，遺構；大塚雅之　遺物；賀来孝代
第２節，遺構；大塚雅之　遺物；今平昌子
第３節，遺構；大塚雅之　遺物；梁木　誠
第４節，遺構；大塚雅之　遺物；今平利幸
第５節，大塚雅之
第４章　第１節，大塚雅之
第２節，今平昌子
第３節，今平利幸

9　本遺跡に関する出土遺物、図面、写真等、調査の成果品の全ては宇都宮市教育委員会が保管している。

〔指導助言〕宇都宮市文化財保護審議委員　塙　静夫
同　大金宣亮
同　橋本澄朗

〔事務局〕　宇都宮市教育委員会

教育長	藤田昌平		
教育次長	近能忠良		
文化課課長	安達光政		
文化振興係長	北条和久	文化財保護係長	定岡明義
文化振興係	湯沢孝夫	文化財保護係	手塚英男
同	臼井成志	同	梁木　誠
同	高栖良子	同	小松俊雄
博物館建設推進班	渡辺　卓	同	大塚雅之
同	白井義雄	同	神野安伸
同	片山　繁	同	今平利幸
同	阿部邦男	同	青木　徹

凡　例

本書の記述、挿図、図版は以下のとおりである。

1　本遺跡の略称は「ＵＫＡ」である。
2　遺構の名称は竪穴住居跡＝SI, 溝跡＝SD, 土坑＝SK, 性格不明遺構＝SX, ピット＝P，と表記している。
3　遺構の番号は調査段階では種別、検出順に付したが、整理の過程で新たに付し直したものもある。
4　遺構の縮尺は１／60である。
5　遺構断面図（セクション図）内の数値は標高を表し、原則として遺構ごとに統一してあるが異なる場合はその都度、表示している。
6　平面図の方位は磁北〔建設省国土地理院（地磁気要素1980.0年値　偏角W 6° 37'0〕を用いている。
7　遺構実測図の土層説明においては、次の略号を用いた。

ロームＢ・・・・・・関東ロームブロック
ローム粒・・・・・・関東ローム粒子
ＳＰ・・・・・・・・男体七本桜（Nt-S）通称　七本桜軽石
ＩＰ・・・・・・・・男体今市（Nt-I）通称　今市軽石
ＫＰ・・・・・・・・赤城鹿沼（Ag-K）通称　鹿沼軽石

8　遺物の実測図は１／３である。
9　遺物実測・拓影図の番号は遺構実測図、写真図版中の番号と一致する。

目　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査の経過と方法
第１節　調査に至るまでの経過……1
第２節　調査の方法……1
第３節　調査の経過〔発掘日誌抄〕……2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　遺跡の位置と地理的環境……3
第２節　歴史的環境……4

第Ⅲ章　遺構と遺物
第１節　縄文時代……10
第２節　弥生時代……19
第３節　平安時代……23
第４節　中近世……25
第５節　時代不明遺構……34

第Ⅳ章　まとめ
第１節　縄文時代の遺構について……40
第２節　弥生時代の遺物について……41
第３節　土師器皿について……42

挿図目次

第1図　遺跡周辺微地形図……5
第2図　周辺遺跡分布図……8
第3図　御城跡遺跡遺構配置図……9
第4図　SI01　遺構平・断面図……10
第5図　SI01　出土遺物実測図……10
第6図　SI03　遺構平・断面図……11
第7図　SI03　遺物平面図……12
第8図　SI03　出土遺物実測図(1)……13
第9図　SI03　出土遺物実測図(2)……14
第10図　SK04　遺構平・断面図……14
第11図　SK04　出土遺物実測図……14
第12図　SK05　遺構平・断面図……15
第13図　SK06　遺構平・断面図……15
第14図　SK07　遺構平・断面図……15
第15図　SK07　出土遺物実測図……16
第16図　SK13　遺構平・断面図……17
第17図　SK20　遺構平・断面図……17
第18図　表土中遺物実測図……18
第19図　SI02 遺構平・断面図……19
第20図　SI02 出土遺物実測図……19
第21図　SX01 遺物平・断面図……20
第22図　SX01 出土遺物実測図……22
第23図　表採資料遺物実測図……22
第24図　SI04 遺構平・断面図……23
第25図　SI04 出土遺物実測図……24
第26図　1号塚遺構平・断面図……25
第27図　1号塚出土遺物実測図……26
第28図　2号塚遺構平・断面図……27
第29図　3号塚遺構平・断面図……27
第30図　4号塚遺構平・断面図……28
第31図　4号塚出土遺物実測図……29
第32図　5号塚遺構平・断面図……30
第33図　6号塚遺構平・断面図……31
第34図　6号塚出土遺物実測図……31
第35図　7号塚遺構平・断面図……32
第36図　8号塚遺構平・断面図……32
第37図　9号塚遺構平・断面図……33
第38図　土坑平・断面図(1)……35
第39図　土坑平・断面図(2)……37
第40図　SD01,02 遺構平・断面図……39

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表(1)……4
第2表　周辺遺跡一覧表(2)……6
第3表　周辺遺跡一覧表(3)……7
第4表　1号塚遺物観察表……26
第5表　4号塚遺物観察表……29
第6表　御城跡遺跡出土土師器皿法量比一覧表……43

図 版 目 次

PL1 ① 確認調査風景
② 調査区全景〔表土除去時〕
PL2 ① 調査区全景〔調査終了時〕
② 調査区全景〔調査終了時〕
PL3 ① ＳＩ０１断面
② ＳＩ０１完掘
PL4 ① ＳＩ０３遺物出土全景
② ＳＩ０３生活面出土状況
PL5 ① ＳＩ０３炉近景
② ＳＩ０３出入口と炉近景
PL6 ① ＳＫ０４遺物出土状況
② ＳＫ０５完掘
③ ＳＫ０６断面
④ ＳＫ０７遺物出土状況
⑤ ＳＫ１３遺物出土状況
⑥ ＳＫ２０完掘
PL7 ① ＳＩ０２断面
② ＳＩ０２断面
PL8 ① ＳＩ０２遺物出土状況
② ＳＸ０１遺物出土状況
PL9 ① ＳＩ０４全景
② ＳＩ０４遺物出土状況
PL10 ① １号塚断面
② ２号塚全景
③ ２号塚断面
④ ４号塚全景
⑤ ４号塚断面
⑥ ４号塚遺物出土状況
PL11 ① ５号塚全景
② ５号塚断面
③ ６号塚断面
④ ６号塚遺物出土状況
⑤ ７号塚全景
⑥ ７号塚断面
PL12 ① ８号塚全景
② ８号塚断面
③ ９号塚全景
④ ９号塚断面
⑤ ＳＩ０１調査風景
⑥ 塚部調査遠景
PL13 ① ＳＫ０１完掘
② ＳＫ０２完掘
③ ＳＫ０３完掘
④ ＳＫ０８断面
⑤ ＳＫ０９断面
⑥ ＳＫ１０断面
PL14 ① ＳＫ１１完掘
② ＳＫ１２断面
③ ＳＫ１４完掘
④ ＳＫ１５断面
⑤ ＳＫ１７完掘
⑥ ＳＫ１８断面
PL15 ① ＳＫ１９完掘
② 甕形土器出土状況
③ ＳＤ０１完掘
④ ＳＤ０２完掘
PL16 ＳＩ０１出土遺物
ＳＩ０３出土遺物(1)
PL17 ＳＩ０３出土遺物(2)
ＳＫ０４出土遺物
ＳＫ０７出土遺物
PL18 表土中遺物
ＳＩ０２出土遺物
ＳＸ０１出土遺物(1)
PL19 ＳＸ０１出土遺物(2)
PL20 表採資料(1)
PL21 表採資料(2)
ＳＩ０４出土遺物
１号塚出土遺物(1)
PL22 １号塚出土遺物(2)
PL23 １号塚出土遺物(3)
４号塚出土遺物(1)
PL24 ４号塚出土遺物(2)
６号塚出土遺物
１号塚出土遺物（集合）
PL25 ４号塚出土遺物（集合）

第Ⅰ章　調査の経過と方法

第１節　調査に至るまでの経過

御城跡遺跡（宇都宮市駒生字北原）は宇都宮市埋蔵文化財報告第10集「宇都宮の遺跡」:S58には№150で記載されている周知の遺跡であり、その内容は江戸時代に築造と思われる９基の高塚である。今回の調査が行われる前は篠竹が密に繁茂しており、容易に人が中に入れないような藪で、その中に９基の高塚が点在していた。その内容から遺跡名は御城跡高塚群の名称であった。　平成４年６月、株式会社ユーエスケーより本遺跡を含めてこの周辺約10,000㎡を住宅地として開発したい旨の照会があった。本教育委員会はこの遺跡を避けての開発ができないか協議を行ったが、開発者である株式会社ユーエスケーは諸般の事情でどうしても開発せざるを得ない状況になってしまっているため、発掘調査を行い記録保存することになった。

発掘調査を行うにあたり高塚群だけでなく、開発面積が約10,000㎡と広範囲なため、周囲に確認調査を行うこととなった。確認調査は同年８月24日と25日の両日に、施工業者の重機（パワーショベル）によって当課職員立ち会いのもとにローム直上まで表土を剥削した。その結果、縄文時代と思われる住居跡２軒、土坑２基の他、縄文土器片多数が確認された。

27日、この結果を基に再び担当者と協議を行い、高塚９基と遺構が認められた約 2,000㎡について本調査を実施することで合意が成立した。また、発掘調査に必要な費用面は原因者である株式会社ユーエスケーが負担し、調査は宇都宮市教育委員会が担当することになった。

同年８月31日から調査開始。造成工事と平行して実施し、調査が終了次第遺構は埋め戻されていくという緊急の調査であった。

第２節　調査の方法

御城跡遺跡の調査区は大きく２地区に分割され、西側が市道655号に接している。区内には調査対象区外になる２軒の民家が存在しており、便宜上これより北を北地区、南を南地区と呼称した。調査の手順は、造成の都合上、南地区の７基の高塚の切開、南地区の遺構調査、次いで北地区にある２基の高塚の切開と行っていった。

確認調査の結果、北地区には高塚以外の地下遺構は確認されなかったので２基の高塚調査終了を待って開発となった。南地区には７基の高塚以外に前述した地下遺構が確認されたので、高塚調査終了後重機により、ローム直上まで黒色土を排土し、縄文・平安期の遺構の調査を行った。調査前の地形測量と、地表に認められる９基の高塚の平面図は、開発業者に依頼した。なお、高塚の平面実測の際の等高線は、20㎝間隔で行った。したがって９基の高塚の平面図測量の時間を省いて、直接遺構の排土作業に取りかかることができたため、調査期間短縮につながった。

グリットの設定は10mグリットとし、北東角を起点に、西方向へＡ～Ｆとアルファベットで、南方向へは１～10と数字で行った。

遺構毎の調査手順は以下の通り。

① 壁のほぼ中央に直行するようにセクションベルトを設定し、生活床面まで掘り下げる。その後、断面図を作成し記録写真を撮影する。

② セクションベルトを除去し、遺物出土全景、及び遺物出土近接写真を撮影する。その後、遺物平面図を作成し、遺物を取り上げる。

③ 床面を精査し、柱穴痕、周溝痕、その他生活面に於いて存在し得る遺構を掘削し、断面を記録する。

④ さらに床面を精査し、貼床が認められる場合は掘り方まで掘削し、断面を記録する。

なお図面は1/20で作成した。

また遺物は3～4㎝以上のものについては番号を付して全て現位置を記録した。

土坑については半裁し、断面を記録した後、掘り上げて1/20の図面で記録した。

第3節　調査の経過　〔発掘日誌抄〕

8月24日　確認調査開始。10mおきに重機でトレンチを入れる。地形が東から西へ傾斜しているためトレンチの方向も東西に入れる。

25日　確認調査終了。縄文時代の遺構が複合していることが確認できた。

9月1～2日　高塚9基についての平面図測量。

4日　プレハブ、テント等の搬入。

7日　作業員募集のための依頼文書を西中丸自治会長に持参で提出。

14日　本調査開始。3号、5号、9号高塚切開。南地区の黒色土排土を急ぐため、この3基を優先する。(南地区を優先して調査を始める。)

16日　5号、9号高塚よりゴミ出土。この2基は中近世の高塚ではない。

21日　7号、8号高塚調査開始。

24日　4号、6号高塚調査開始。

29日　4号高塚よりカワラケ出土。

10月7日　南地区遺構排土開始。全面排土により、遺構数増加。西端に平安期の竪穴住居跡確認

29日　南地区遺構調査終了。

11月2日　1号、2号高塚調査開始。(北地区)

9日　1号、2号高塚調査終了。御城跡遺跡発掘調査終了。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

宇都宮市西部の平地は、主に第四紀台地である。御城跡遺跡が載る宝木台地は田川右岸（西側）の代表的な台地で、南北に細長く形成されており、西の姿川に挟まれた形になる。この宝木台地の北端は宇都宮市上小池町の今市扇状地扇端付近（徳次郎北の日光宇都宮道路と国道119号の最も接近する付近）であり、ここから南へ向かって宝木、鶴田、陽南、雀宮と続き、小金井、小山へと伸び、結城台地へと連続する。

宝木ローム以降をのせたこの利根川、鬼怒川、思川にかこまれた台地（宝木台地）の分水界は東に偏在しており、宇都宮市街地から南では田川右岸300～400m付近にある。すなわち台地は東端から緩やかにＳＷ方向に傾斜しているため田川に流入する自然河川は存在せず、小河川による浸食谷はすべてＳ～ＳＳＷ方向へ指向している。鶴田西方の一の沢、二の沢、三の沢等の地名はこの台地を開析する比高の小さな小河川（鶴田川）の支流のことで、大谷街道に直行するように連続している。これらの小河川は、宝木台地を南北方向に細かく開析した後、すべて姿川へ合流する。

御城跡遺跡は宇都宮市街地の北西約３kmの宝木台地上にあり、この台地を開析し南流する駒生川の源流近辺で、沢が樹枝状に分岐した間の舌状台地上、標高約 130mに位置する。

駒生川は上記の鶴田川の支流であるが、水量、低地幅共に大きく、実質的には本流に値する。共にこの近辺が二つの河川の源流であり、以前は低地が水田に姿を変えて掌状に広く分布していたが、現在は市街地化されているところが多く、確認は困難である。これらの二河川は、遺跡より約3,000m下流の鶴田町富士見小学校西方付近合流、さらに2,000m下流の下欠町付近にて姿川に合流する。姿川は新里付近を源流とする河川であるが、蛇行が著しく、その低地の幅は広い。また段丘面も、駒生川や鶴田川よりも一段低位であり、古い河川であり、遺跡の西方約1,500mにその流れがある。台地の傾斜が SSW方向であり、すぐにでも姿川に合流しそうであるが、宝木台地と姿川低地の接する部分に第三紀基盤の丘陵が南北に連なっており（西の宮団地、育成牧場、鶴田羽黒山、等）、地形上の特徴となっている。射撃場跡の湿地はこの丘陵の一部を削った箇所からの湧水が駒生川低地に流れ出るところである。土地利用としては、低地はすべて水田に利用されており、谷地田を形成している。また、低地に削られなかった台地上の面は一般に水利はあまり良好ではなく、以前はほとんどが畑地を中心とした土地利用がなされている。水田も若干認められるがこれは地下水をポンプで揚水して行われているのが普通である。戦後、大谷街道や環状線の建設に伴い開発が進み、最近では住宅地の進出が著しい地域である。

第２節　歴史的環境

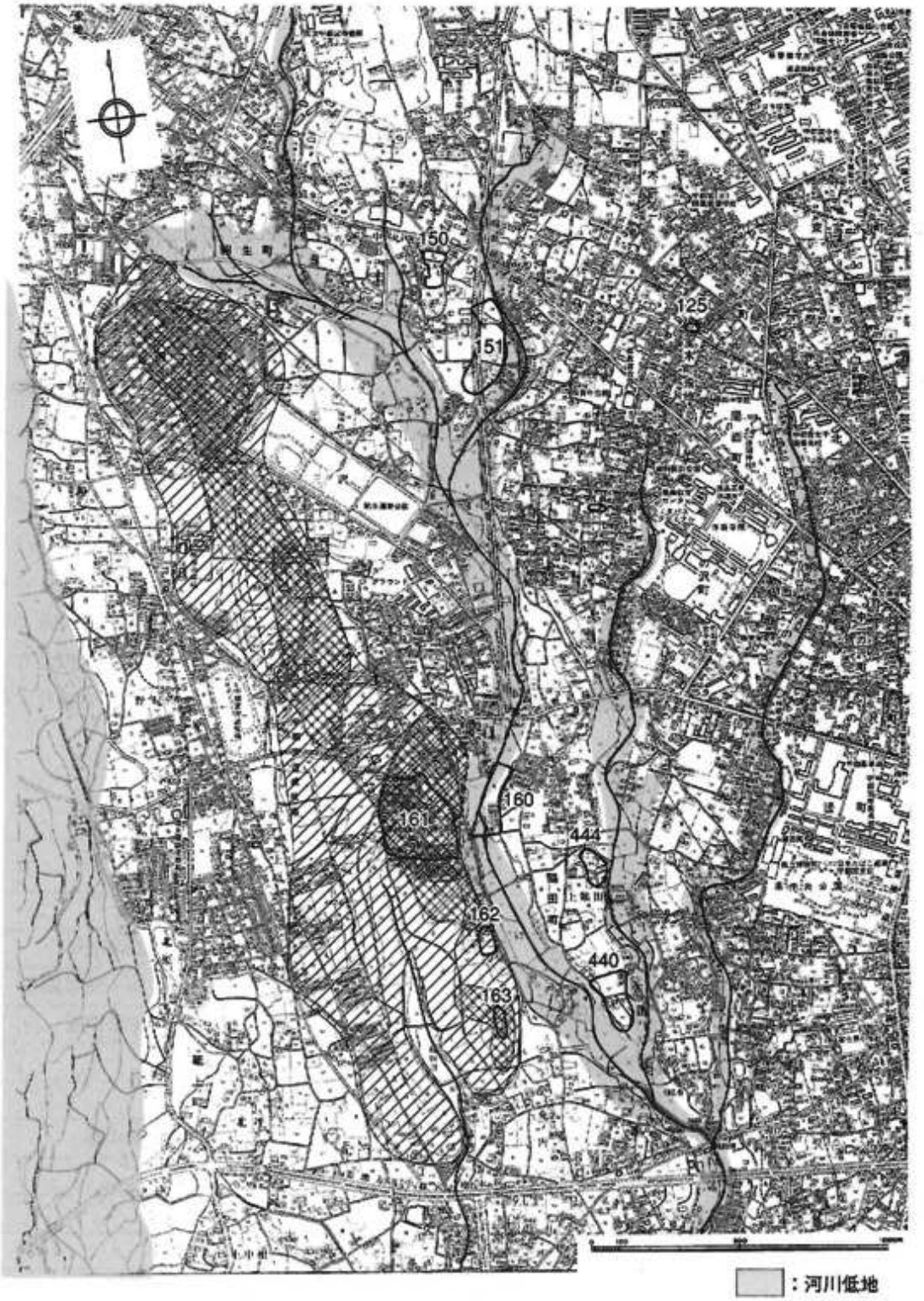
御城跡遺跡の所在する宇都宮市の西部地区の宝木、駒生地区は、市街地中心部より放射状に伸びる幹線道路が早くから発達していた。とくに通称大谷街道と呼ばれる県道は、大谷地区から切り出された石材（大谷石「軟質緑色凝灰岩」）をトロッコに載せて市街中心部まで運んだ道であったため交通の便も良く、沿線は早くから住宅地化が進んでいた。特に昭和40年代以降、自家用車の普及に伴い、中心部へ通う人々の住宅が急加速で増加していった。その影響もあってか、昭和58年までに実施された遺跡分布調査において確認できた遺跡は少ない。

この地域を流れる鶴田川は総延長は８km足らずの小河川であるが、水量は豊富である。そのためか、流域には縄文時代の集落が散見できる。中でも遺跡番号161 羽黒下団地遺跡は縄文中期の大規模な集落跡であり、鶴田川低地からは比高約20mの高台に位置する。また151 の御城田遺跡は環状線建設に先立ち、昭和56年から58年まで栃木県教育委員会、埋蔵文化財センターにより発掘調査がなされた。竪穴住居跡72軒、袋状土坑843基の縄文中期前半から後期中葉の集落跡である。

これに続く弥生時代は、この付近では北東へ約３kmにある野沢遺跡以外は知られていなかったが、今回の調査でこの付近にも弥生時代の遺跡の分布がありそうである。地形的特徴から推測すると、鶴田川の支流、駒生川の源流が本遺跡付近中丸の低地であり、近年まで池や湿地がみられた。これは今市扇状地の扇央部である宝木地区を伏流してきた地下水が湧き出るのが、扇端のこの付近である。この鶴田川の豊富な水量の理由はこのあたりにあると思われる。稲作導入期の原始水田ともいうべき生産基盤が、この付近に湿地に展開していた可能性が今回の調査で指摘できそうであり、今後、この地域の類例を待ちたい。

No.	遺　跡　名	所　在　地	種　　別	時　　期	備　　考
150	御城跡遺跡	駒生町844-1	集落・高塚	縄文･弥生･平安･中近世	
125	宝木古墳	一の沢町284	古墳	古墳	Ｓ22頃削平
151	御城田遺跡	駒生町921	集落	縄文	Ｓ56～58県調査
160	鶴田中原遺跡	鶴田町1124	集落	縄文・古墳	Ｈ４県調査
161	羽黒下団地遺跡	鶴田町1742-3	集落	縄文	
162	長峰遺跡	鶴田町1659-3	集落	縄文・奈良	
163	亀が窪古墳群	鶴田町1649	古墳	古墳	円墳４基
201	鶴田西の宮遺跡	鶴田町3629-2	集落	縄文	
440	上鶴田南遺跡	鶴田町3629-2	集落	奈良・平安	
444	上鶴田北遺跡	鶴田町966-３	集落	縄文・平安	

第１表　周辺遺跡一覧表（１）



：河川低地
：丘陵
：第三紀基盤

第１図　遺跡周辺微地形図

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
29	野沢北遺跡	野沢町701	集落	縄文～古墳	籾圧痕土器
30	野沢遺跡	野沢町641	集落	縄文～古墳	野沢式標式地
31	野沢石塚遺跡	野沢町534－2	集落	縄文・弥生	
46	野沢向内遺跡	野沢町467	集落	縄文	
121	仁良塚遺跡	宝木本町1769	集落	縄文・古墳	
122	源道寺遺跡	駒生町3189－1	集落	縄文・古墳	
133	日吉遺跡	福岡町1181－4	集落	縄文	
134	多気城跡	田下町721	城館跡	鎌倉	
135	佐宗前遺跡	田下町100	集落	古墳	
136	大谷寺洞穴遺跡	大谷町119	洞穴	縄文・弥生	特別史跡、S40調査
137	瓦作古墳群	大谷町843	古墳	古墳	円墳4基
138	坂本高塚群	大谷町1119	高塚	江戸	
141	向山根遺跡	田野町271	集落	古墳～奈良	S58・60調査
142	境木遺跡	大谷町2012－2	集落	縄文・古墳	
143	漆久保遺跡	大谷町1428－1	集落	縄文	
144	梅林遺跡	大谷町1825－2	集落	縄文・古墳	
145	上の原遺跡	大谷町1496－1	集落	旧石器・古墳	
146	宗円塚古墳群	下荒針町1829	古墳・供養塚	古墳・江戸	
147	羽下薬師堂裏古墳	下荒針町2650	古墳	古墳	
148	上の原古墳群	大谷町1730	古墳	古墳	S61調査 円墳14基
149	中城跡	駒生町2112	城館跡	鎌倉	H2調査
153	サルボ山高塚群	下荒針町1848－2	高塚	江戸	
154	大久保遺跡	下荒針町2961	集落	縄文	S44～45県調査
155	台耕上遺跡	下荒針町3020	集落	縄文	
156	長坂天王寺遺跡	下荒針町3918－7	集落	縄文	H5確認調査
157	宝性寺跡	飯田町497－1	寺院跡	江戸	
158	高田遺跡	飯田町11241	集落	縄文・古墳	
159	筒花高塚群	飯田町177－1	集落	縄文・古墳	
164	上欠団地遺跡	上欠町1219	集落	縄文	S52～53県調査
165	初網遺跡	上欠町1062	集落	縄文	
166	高尾神遺跡	上欠町880－2	集落	縄文	S49～50県調査
167	富士山台遺跡	上欠町1127	集落	縄文・奈良	

第2表　周辺遺跡一覧表（2）

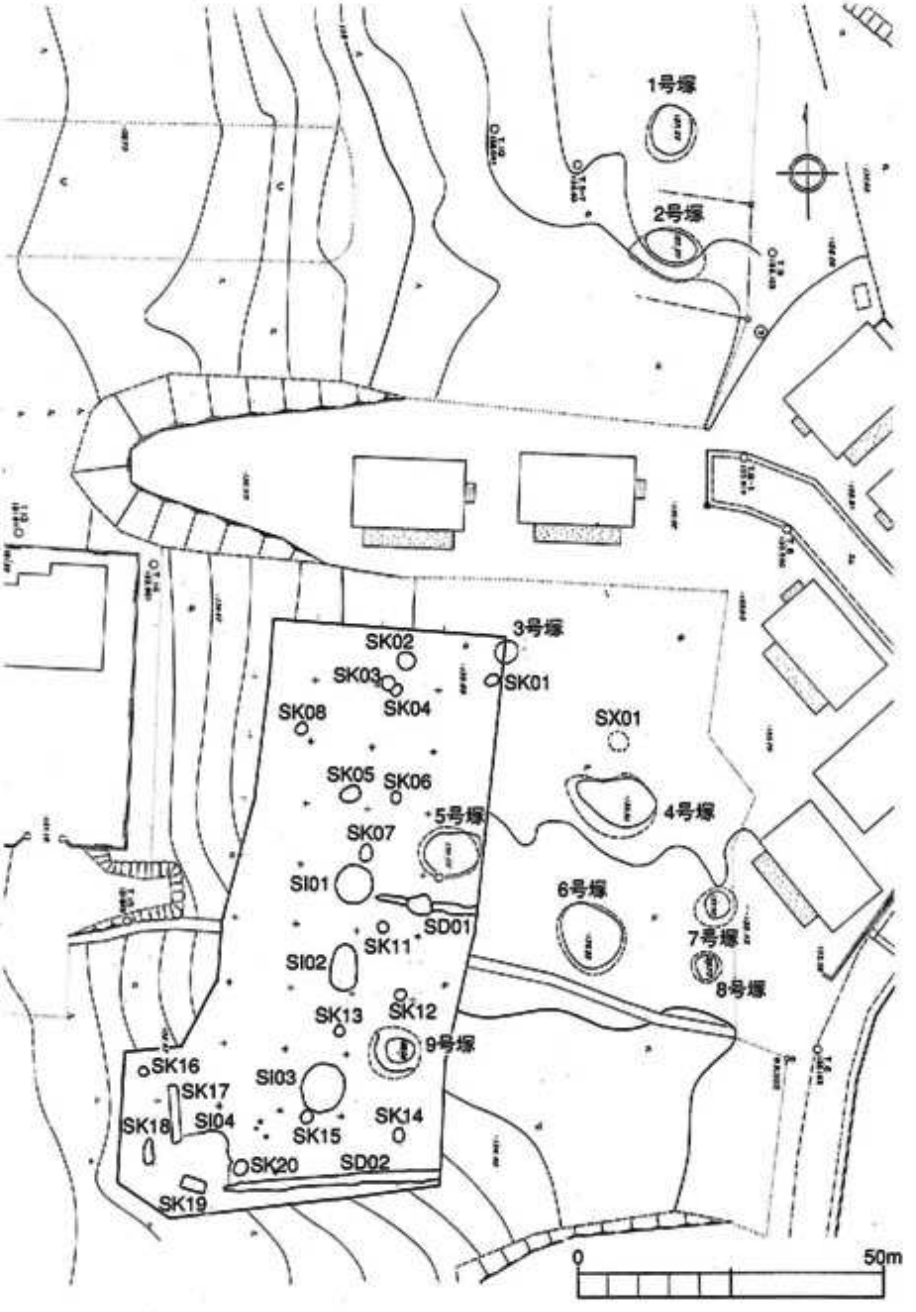
No.	遺跡名	所在地	種別	時期	備考
168	亀岡坪遺跡	上欠町649－2	集落	奈良・平安	
169	沓掛遺跡	上欠町526－1	集落	奈良・平安	
172	植の内古墳	下砥上町1259－1	古墳	古墳	円墳5基
173	根古谷台遺跡(含・聖山公園)	砥上町296	集落	縄文～室町	S57～62調査 国史跡
174	宿坪遺跡	下砥上町998－1	集落	縄文・奈良	
175	稲荷古墳群	上欠町718－1	古墳	古墳	S59調査　市指定
176	観音塚古墳	鶴田町1495	古墳	古墳	
178	並塚遺跡	下砥上町1512－1	集落	古墳	
183	犬飼城跡	上欠町39	城館跡	室町	
184	主計内遺跡	下砥上町564	集落	奈良・平安	
185	下砥上愛宕塚古墳	下砥上町470	古墳	古墳	円墳 凝灰岩切石主体
186	ひのき内遺跡	下砥上町312－1	集落	縄文	
187	下砥上古墳群	下砥上町124	古墳	古墳	鶴塚　円墳3基
188	上欠北原遺跡	下欠町604	集落	奈良・平安	
189	下砥上下の内遺跡	下砥上町15	集落・古墳	縄文・古墳	削平古墳1基あり
219	見明遺跡	針ヶ谷町911－2	集落	縄文・弥生	
253	本村遺跡	川田町44	集落・古墳	弥生・古墳	
350	宇都宮城跡	本丸町1	城館跡	鎌倉～江戸	H元～
364	赤土山遺跡	南町10－21	集落	縄文・奈良	
365	前田遺跡	上戸祭町384	集落	古墳・奈良	S62～63調査
368	台ノ内遺跡	下荒針町760	集落	縄文	
369	下荒針西原遺跡	下荒針町2678－1	集落	縄文	
373	長坂南遺跡	下荒針町3810	集落・古墳	縄文・古墳	
374	筒花遺跡	飯田町79	集落	縄文・奈良	
379	宿尻遺跡	上欠町9	集落	古墳	
380	下台原古墳群	下欠町153－1	集落・古墳	古墳	
381	下の内北遺跡	下砥上町68－1	集落	奈良・平安	
382	北之原遺跡	西川田町7081	集落	奈良・平安	
419	富士見団地北遺跡	富士見町580－3	集落	縄文・古墳	
420	山ノ神遺跡	下砥上町161	集落	縄文	
428	割田遺跡	田野町600	古墳・城跡	古墳・戦国	
433	山崎北遺跡	駒生町3021－1	集落	縄文	

第3表　周辺遺跡一覧表（3）

第２図　周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代では竪穴住居跡２軒、土坑６基、弥生時代は竪穴住居跡１軒、遺物がまとまって出土した未確認遺構１基、平安時代は竪穴住居跡１軒、中近世は高塚７基、時期不明のものに土坑14基、溝跡２条がある。



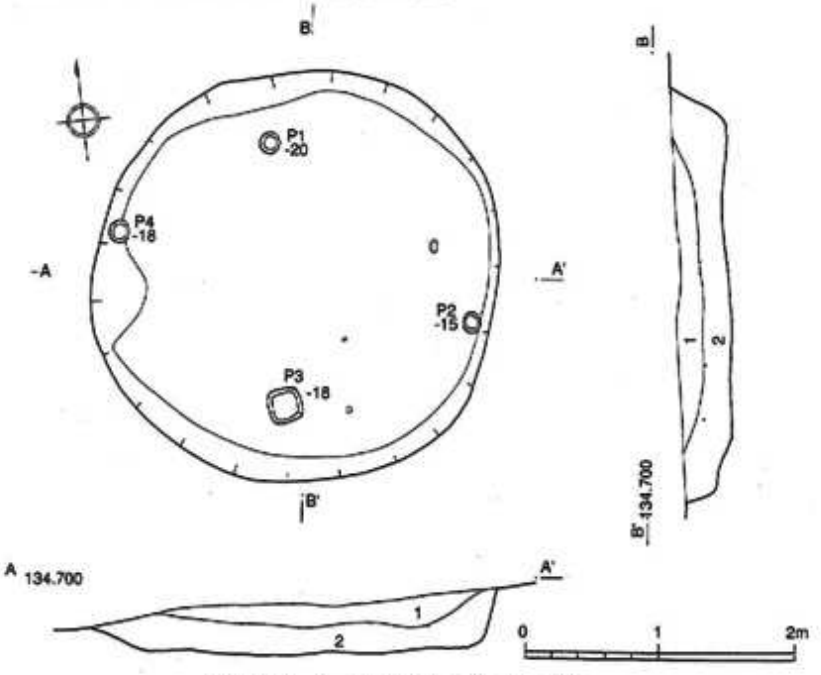
第３図　御城跡遺跡遺構配置図

第１節　縄文時代

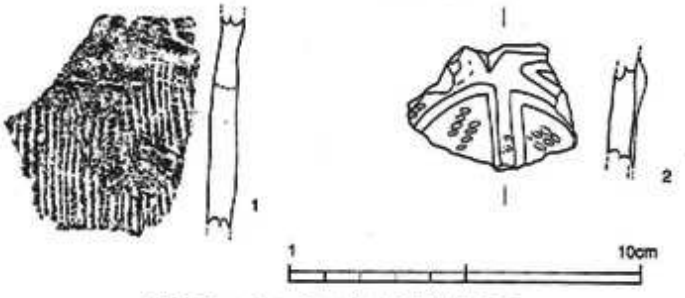
(1)　住居跡

ＳＩ０１（第４，５図：図版３）

位置　調査区のほぼ中央（Ｂ－５～Ｃ－５グリッド）に所在。　平面形　直径約3.0mのほぼ真円形を呈する。壁　堀り込みの深さは約35cmと比較的深く、立ち上がりは約62～71°でしっかりとしている。床面　ローム地山床で貼床は認められない。固くしまった面はなく、若干の凹凸がある。住居埋土の状況　第２層はロームブロックが多く混入しており、人為堆積の可能性がある。第１層は自然堆積。柱穴　ピットが４本、床面から15～20cmの深さである。周溝　無し。炉　無し。遺物　埋土中に散見するが、出土数は少なく、流れ込みの可能性が大。



第４図　ＳＩ０１遺構平・断面図

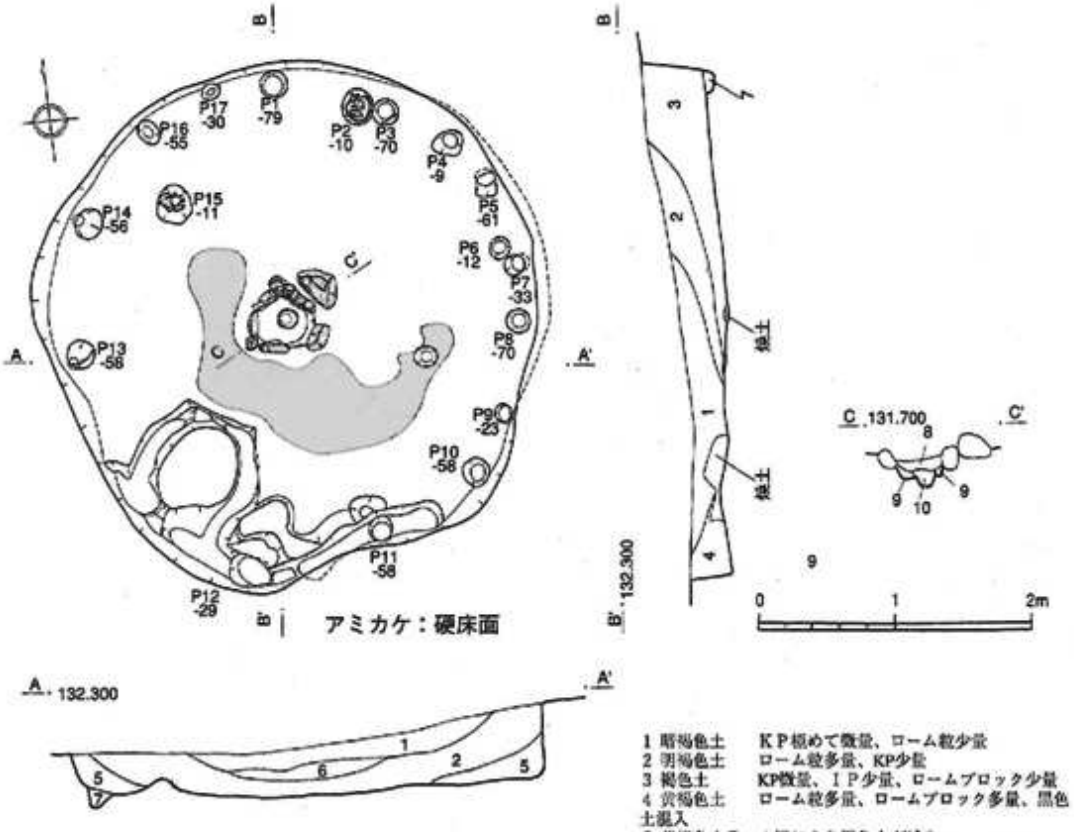


第５図　ＳＩ０１出土遺物実測図

１は胴部破片。上部に無文部分があり、口縁部に近いと思われる。１段Ｒを巻く撚糸を縦位回転に施す。明褐色で、焼成は良好。２は、胴部破片で、２段ＲＬの横位回転を地文とし、微隆帯の両側に沈線をいれる。暗褐色で砂粒を含み、焼成は良好。

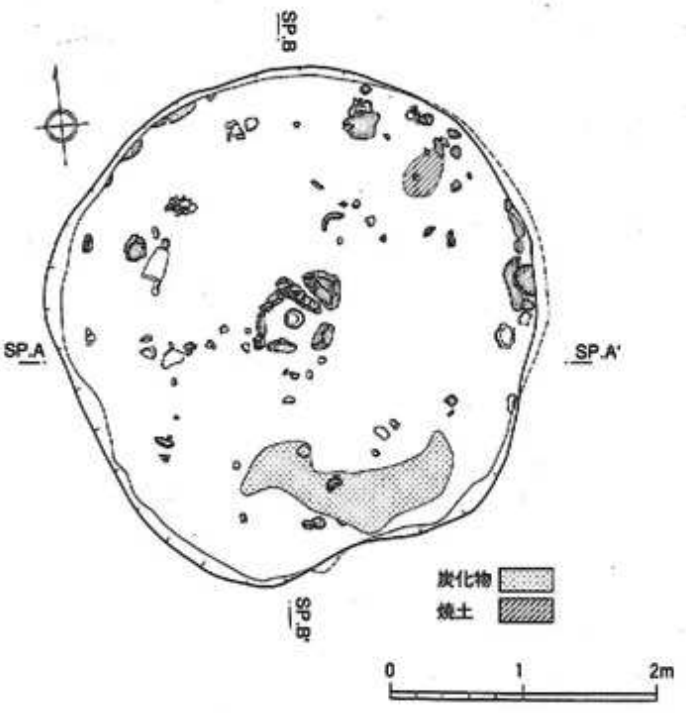
ＳＩ０３（第６，７図：図版４，５）

位置　調査区の南側（Ｃ－６グリッド）に所在。平面形　直径約3.7mの円形を呈する。ただし南東側から南側にかけて凹凸がある。壁　堀り込みの深さは西側と南側で約20～25cm、北側と東側で45～50cmである。立ち上がりは約70～ 116°で東側に一部にオーバーハングが認められる。床面　ほぼ水平。中央部の炉付近の周囲と出入口と推測される南西部の溝付近で一部硬い面が認められる。炉の周囲の床面は焼けている。埋土の状況　レンズ状の自然堆積。柱穴　壁の周囲を囲むように並ぶ。浅いもので９～30cm深いもので50～80cm。周溝　南壁の一部に認められる。炉　ほぼ中央に位置し、直径約50cm、流紋岩等を環状に配置するが、炉南側に置かれている１個だけは砂質凝灰岩である。石はいずれも被熱により赤色に変色している。石は床面に置いただけでなく半分を地下に埋設してあり、しっかりと固定してある。炉の深さは約20cmで中央には鉢の底部が埋設されている。その他　南西壁下には出入口施設の一部と思われる溝がある。北壁から東壁にかけて、床面に長楕円形の石が置かれている。遺物の出土状況　すべて破片で、床直上から10cmの範囲に分布している。ただし、大きな破片は床直上のものが多い。



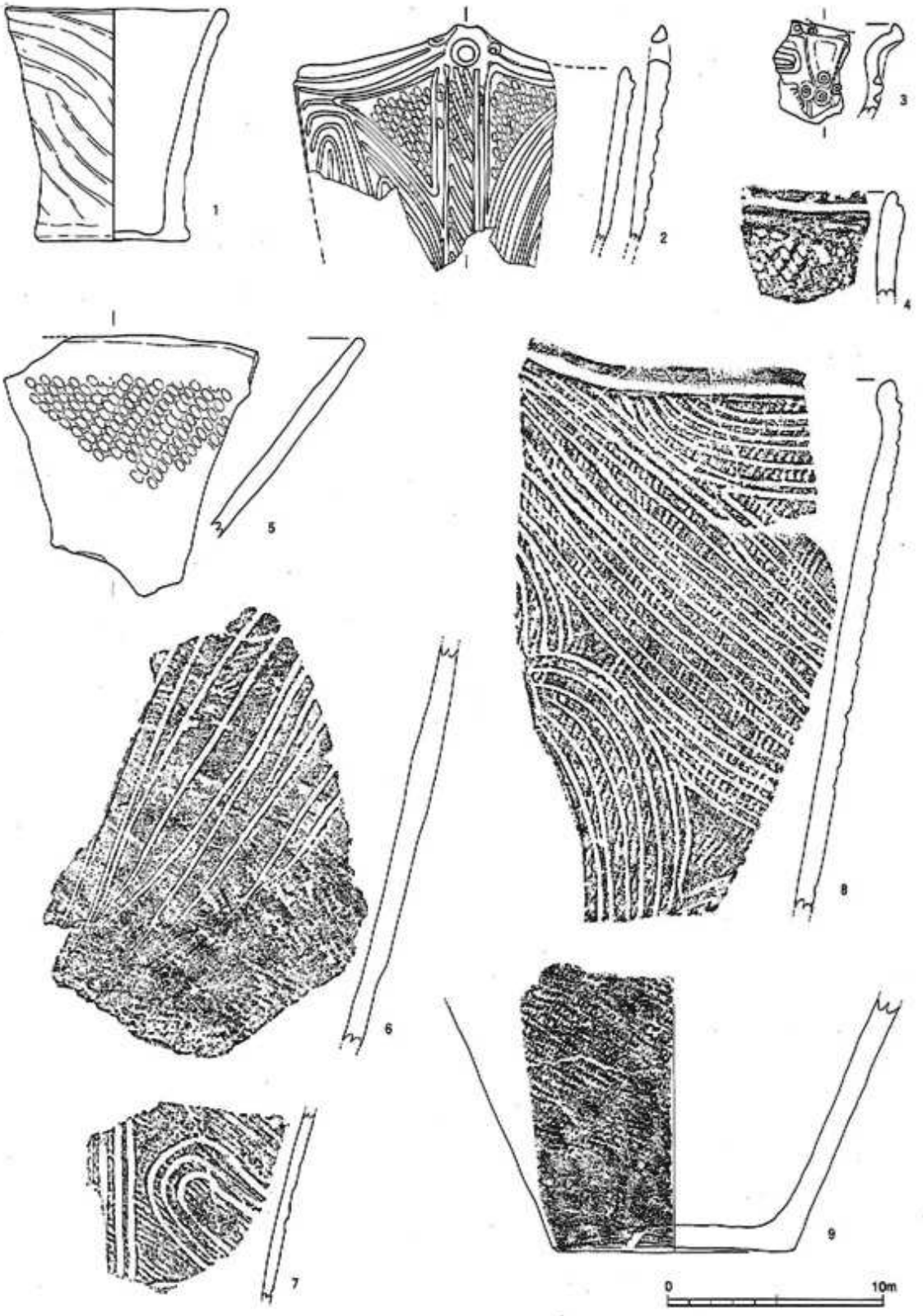
1 暗褐色土　ＫＰ極めて微量、ローム粒少量
2 明褐色土　ローム粒多量、KP少量
3 褐色土　KP微量、ＩＰ少量、ロームブロック少量
4 黄褐色土　ローム粒多量、ロームブロック多量、黒色土混入
5 黄褐色土Ⅱ　４層により黒色土が減少
6 黄褐色土Ⅱ　１層に焼土粒少量、炭化物粒少量混入
7 黄褐色土Ⅲ　ローム粒少量、小ロームブロック微量混入
8 黒褐色土　ローム粒少量、焼土少量、ＫＰ少量
9 黄褐色土Ⅲ　ＫＰ粒多量、ＫＰブロック多量
10 褐色土Ⅱ　ローム粒多量、焼土多量、ＫＰ粒多量

第６図　ＳＩ０３遺構平・断面図

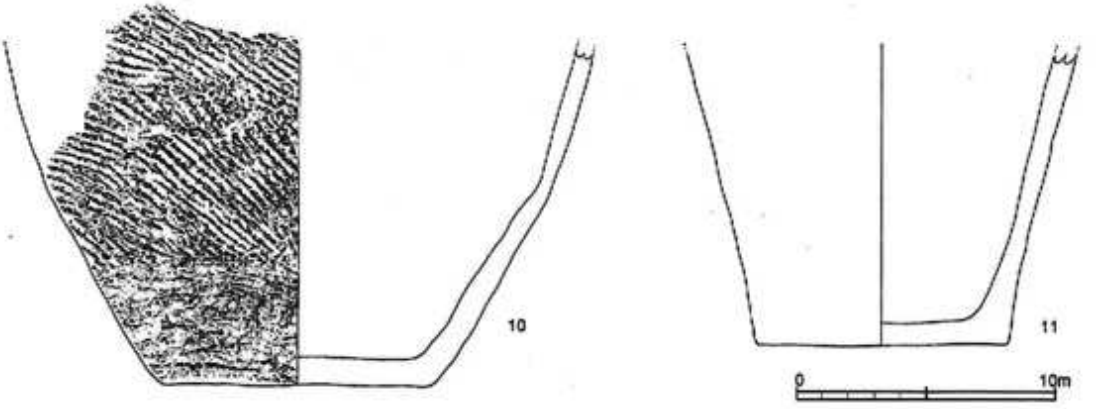


第７図　ＳＩ０３遺物平面図

１は小型のコップ形深鉢で、ほぼ完形である。口径10.2cm、器高10.8cm、底径7.1cm 。最小径は底部よりやや上にあり反り気味に立ち上がる。外面は指などで斜めにナデつけ、らせんの畝状を呈す。暗赤褐色で砂粒をやや多く含み焼成は普通である。底面から2cmを残し、それより上の外面に煤が付着している。２はやや小型の深鉢の口縁部から胴部上半の破片で、推定口径は16.0cmである。口縁部には１条の沈線がめぐり、小突起がつけられ、その部分に穿孔及び刺突文を施す。２段ＬＲの横位回転による単節縄文を地文とする胴部は、小突起の孔から２本の沈線が縦に分割するように垂下し、その２本の沈線間は斜めの平行沈線を施す。他は集合沈線で直線、曲線を描く。淡褐色で微細砂粒を含み、焼成は良好。３は口縁部の破片で微隆帯を口唇部から垂下し、その始まりと終わりに刺突による盲孔を施す。沈線で文様を描く。暗褐色で焼成良好。４は口縁部破片。口縁部外面に１条の沈線をめぐらし、２段ＬＲの単節縄文を横位に施す。明褐色で微細砂粒、蛇石を含み、焼成は普通。５は口縁部破片で粗製の浅鉢のようである。２段ＬＲの単節縄文を横位に施し、下半は後でナデている。外面上半には煤が付着している。淡褐色で砂粒を含み、焼成は普通。６は胴部破片で、２段ＲＬの単節縄文の横位回転を地文とし、集合沈線を施す。上から描き下ろしてきた沈線が破片の途中で終わっており、底部に近い部分と思われる。灰褐色でわずかに雲母を含み、焼成は良好。７は胴部破片で、１段Ｒの無節縄文の横位回転を地文とし、集合沈線で直線、曲線を描く。暗褐色で砂粒を含み、焼成は良好。破片外面上半部には、煤の付着が著しい。８は深鉢の口縁部及び胴部の破片で口縁部内面は肥厚し、外面には１条の沈線を施す。２段ＬＲの単節縄文の横位回転を地文とし、集合沈線で直線、曲線を描く。外面は暗灰褐色、内面は明褐色を呈し、細砂粒を含み、焼成は良好。９は深鉢の底部で、底径11.3cm。２段ＲＬの単節縄文を横位に施した後、下半をナデている。淡褐色で砂粒を含み、焼成は普通。外面の下半、内面の上半及び底部外面に煤付着。10は深鉢の底部で底径11.0cm。１段Ｒの無節縄文を横位に施し、下半を横方向に削り、粗く磨いている。褐色で、焼成は良好。11は深鉢の底部で、底径10.0cm。平底の底部から直線的に立ち上がる。淡褐色で、砂粒を多く含み焼成は普通。内外面とも煤が付着している。



第8図　ＳＩ０３出土遺物(1)

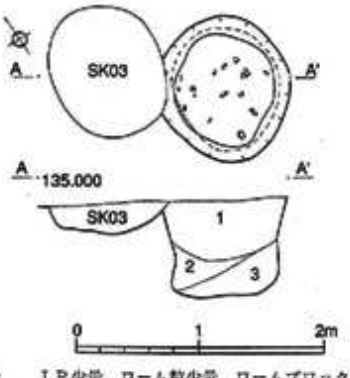


第９図　ＳＩ０３出土遺物(2)

(2) 土　坑

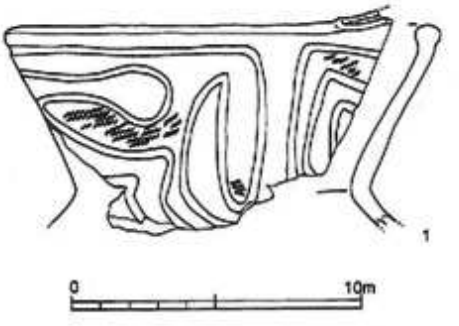
ＳＫ０４（第10，11図：図版６）

Ｂ－２グリッドに位置する。浅い掘り込みのSK03に切られている。形状は南北方向の短楕円形であるが真円形に近い。規模は長軸1.17ｍ×短軸1.06ｍであり、深さは75cm、主軸はＮ16°Ｅを示す。断面は袋状を呈し、深さ30～45cmにくびれがあるが、オーバーハングは５～10cmで小規模である。底部は若干の凹凸があり、縄文土器片が出土している。破片は底面直上であったが、すべて小破片で、底のローム面にはり付くようにして出土している。１は口縁部から頸部にかけての破片で、推定口径15.0cm。折損部には、口縁の一部が高くなる様子がうかがえ、その部分には口唇部に沈線がはいる。沈線により文様を描き、縄文部と無文部を交互に繰り返す。縄文は２段ＬＲの単節縄文。暗褐色で微細砂粒、輝石を含み、焼成は良好。外面の磨滅が著しい。



1　黒褐色土　ＩＰ少量、ローム粒少量、ロームブロック少量、粘り有り
2　褐色土Ⅱ　３層よりローム粒が増加する
3　明褐色土　ローム粒多量、ロームブロック微量

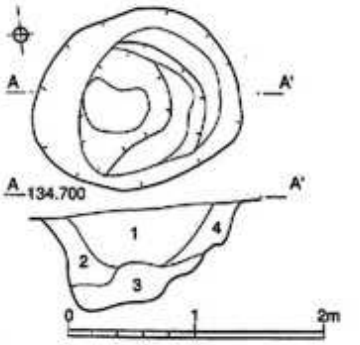
第10図　ＳＫ０４遺構平・断面図



第11図　ＳＫ０４出土遺物実測図

ＳＫ０５（第12図：図版６）

Ｃ－３～Ｃ－４グリッドに位置する。形状は東西方向の短楕円形で、規模は長軸1.63ｍ×短軸1.33ｍであり、深さは74cm、主軸はN86°Ｅを示す。西壁はほぼ垂直面から開きながら立ち上がるが、東壁は２段の平坦面をもって徐々に立ち上がる。埋土は非常に硬く締まっており、ローム地山の方が、かえって柔らかい。底部は若干の凹凸があり、遺物の出土はなかった。

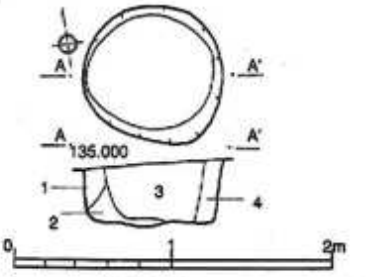


1　暗褐色土　　ＩＰ、ＳＰを少量混入、硬くしまる
2　暗褐色土Ⅱ　　１層よりＩＰ、ＳＰが減少、しまりあり
3　明褐色土　　ローム粒主体、ＩＰ少量、ＳＰ少量、１層より柔らかい
4　褐色土　　ＩＰを少量含む、しまりあり

第12図　ＳＫ０５遺構平・断面図

ＳＫ０６（第13図：図版６）

Ｂ－３グリッドに位置する。形状は南東部が突出する不定型円形で86×85cm、突出部で直径92cmであり、深さは東側で38cm、西側で31cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、掘り込みは全体的に明瞭である。底面は若干の凹凸があるが、全体的には平坦である。埋土は非常に硬く締まっている。

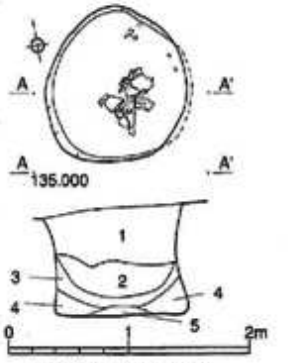


1　褐色土　　ローム粒極めて多い
2　暗褐色土　　ＩＰ少量、ＳＰ少量、硬くしまる
3　明褐色土　　ＩＰ、ＳＰを少量混入、硬くしまる
4　植物（樹木）根による撹乱

第13図　ＳＫ０６遺構平・断面図

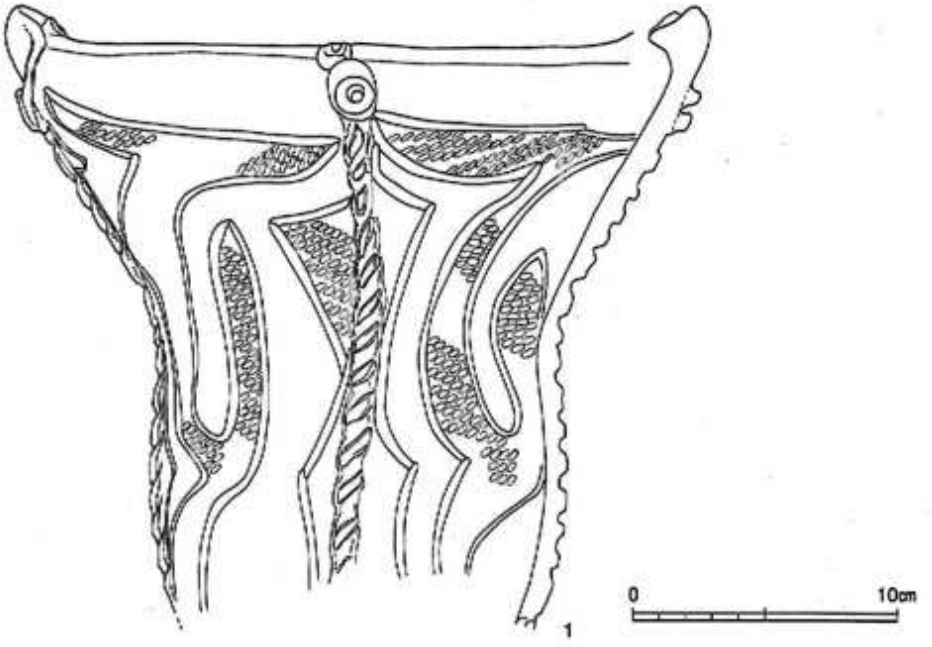
ＳＫ０７（第14図：図版６）

Ｂ－４～Ｃ－４グリッドに位置する。１ｍ南には同時期のSIO1が位置する。規模・形状は長軸1.29ｍ×短軸1.16ｍ、深さ90cmの不定型円形で北部で若干突出する。断面は袋状を呈し、深さ40cmでくびれがあり、オーバーハングは５cmで、一部ではハングしない。底部はほぼ平坦で、縄文土器片と多量の炭化物が多量に出土した。特に№１の土器は炭化物に埋まった状態で出土しており、この土器の内容物が周囲の炭化物であった可能性もある。



1　褐色土　　ＩＰ少量、ローム粒少量
2　暗褐色土Ⅱ　　ＩＰ少量、ＳＰ少量、4～6cm大ローム粒多量
3　明褐色土　　ＩＰ少量、ローム粒少量、黒色土が多量に混入、非常に硬い
4　褐色土　　ＩＰを少量含む、しまりあり

第14図　ＳＫ０７遺構平・断面図

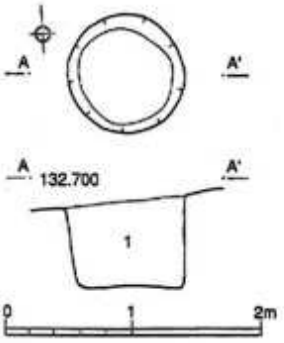


第15図　ＳＫ０７出土遺物実測図

１は深鉢で、底部を欠くものの、かなり全体の様子がわかるものである。口径26.7cm。口縁部には小突起をつけ、内面は肥厚している。盲孔をもつ円形の貼り付け文から、胴部を４分割するように刻み目をもつ隆帯が垂下する。刻み目は斜めに入っていて、１段Ｒの縄自体を表すかのようである。口縁部から３cmほどの無文帯をもち、下部に文様を施す。２段ＬＲの単節縄文を最上部では横位回転、それより下は縦位回転の地文とし、沈線で「Ｊ」字を２段に配置するが、下段の「Ｊ」字部分は欠失している。縄文部分と無文部分を交互に繰り返し、無文部分は、縄文を磨り消している。明褐色で砂粒を含み焼成良好。内外面に煤付着。

ＳＫ１３（第16図：図版６）

Ｃ－７グリッドに位置する。調査区の中央やや南寄りに位置し、SI02とSI03の中間になる。形状はほぼ円形を呈し、規模は南北95cm×東西92cmである。深さは東壁で72cm、西壁で60cmであるが、これは地山が西へ傾斜していることによる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、あまり開かない。掘り込みは非常に明瞭である。埋土はIP、SPを含む褐色土で、ローム粒子のまとまったブロックが、斑点状に混入する。なお、底部はKP層で終束している。遺物は図化できない小さな縄文土器が埋土中に出土している。

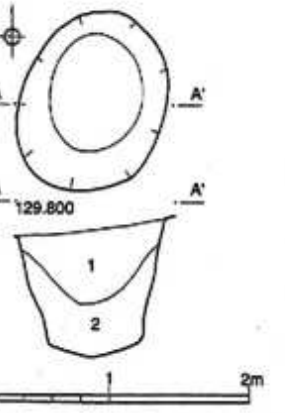


1　黒褐色土　　ＩＰ微量、ＳＰ微量、ローム粒少量、ロームブロック微量混入、床面はＫＰ面

第16図　ＳＫ１３遺構平・断面図

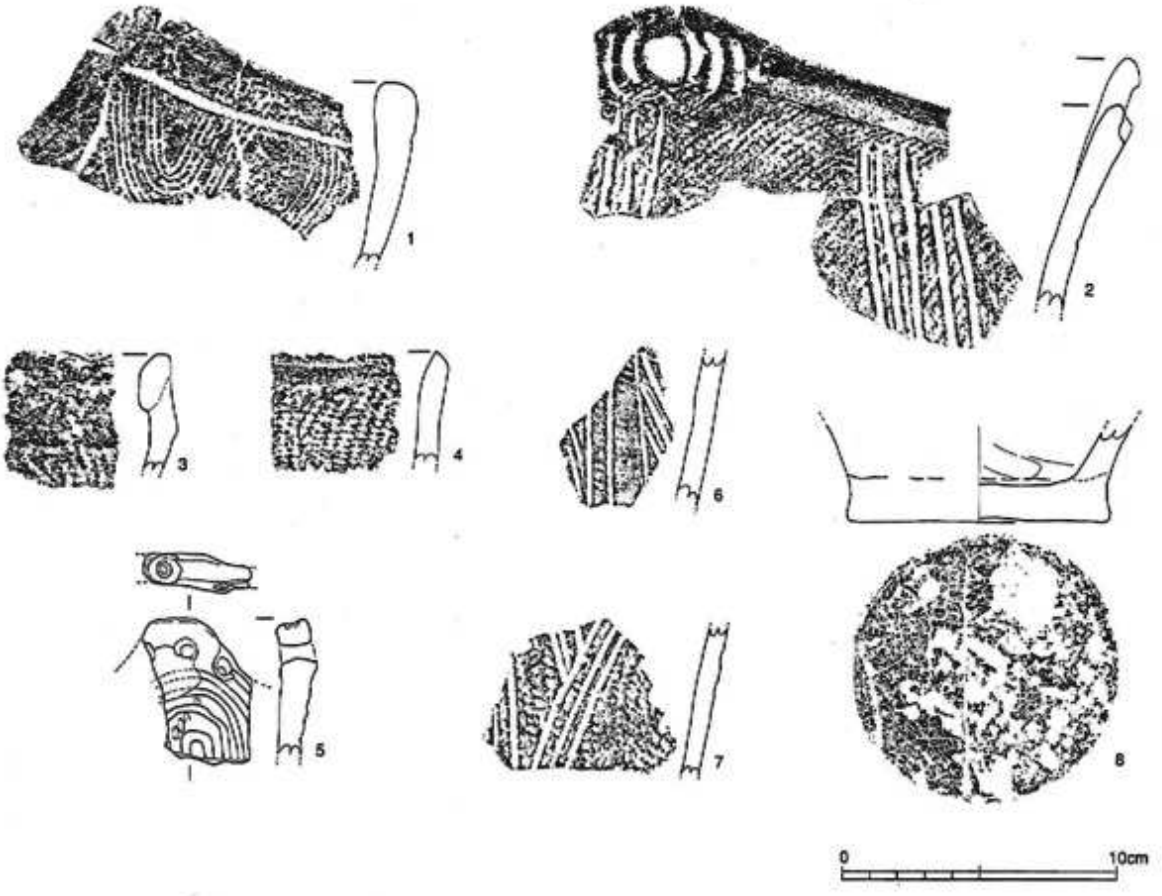
ＳＫ２０（第17図：図版６）

Ｄ－９グリッドに位置する。調査区の南端近くにあり、形状は南北方向の短楕円形である。規模は長軸1.30ｍ×短軸1.02ｍであり、深さは90cm、主軸はN23°Ｅを示す。壁は開きながら立ち上がり、掘り込みは非常に明瞭である。埋土はIP、SPを含む黒色～褐色土が主体で、非常に硬くしまっている。底部は浅い擂鉢状で中心部付近が一番深くなる。遺物の出土はみられない。



1　黒色土　　ＳＰ少量、ＩＰ少量、極めて硬くしまる
2　褐色土　　ＳＰ、ＩＰ、ローム粒、ロームブロック少量づつ混入、硬くしまる

第17図　ＳＫ２０遺構平・断面図



第18図　表土中遺物実測図

表土中遺物

1は口縁部破片で、平行する沈線で文様を描き入れた後、口縁部と文様部分を分けるように1条の沈線を施す。褐色で砂粒を含み、焼成は良好。外面には煤の付着が著しい。

2は口縁部の破片で、口縁部に1条の沈線をもち、2段ＬＲの単節縄文の横位回転を地文とし、集合沈線を施す。口縁の波頂部には盲孔と、それを囲むように平行する弧線を沈線で描く。褐色で砂粒、石英、輝石を含み、焼成は良好。

3は口縁部の破片で、口縁部の内面は肥厚し、外面には無文帯と、2段ＬＲの単節縄文を横位に施す部分の間に微隆帯がある。暗褐色で砂粒を多く含み、焼成は普通。

4は口縁部の破片で、2段ＬＲの単節縄文を横位に施す。褐色で微細砂粒、輝石を含み焼成は良好。

5は口縁部の破片で、口唇部及び口縁部に刺突文を施す。2段ＬＲの単節縄文の横位回転を地文とし、平行する沈線で文様を描く。褐色で微細砂粒を含み、焼成は普通。

6は胴部破片で、縄文の地文後、集合沈線を描く。淡褐色で微細砂粒を含み、焼成は良好。

7は胴部破片。2段ＬＲの単節縄文の縦位回転を地文とし、集合沈線を施す。

8は木業底の底部。褐色で砂粒を含み、焼成は良好。

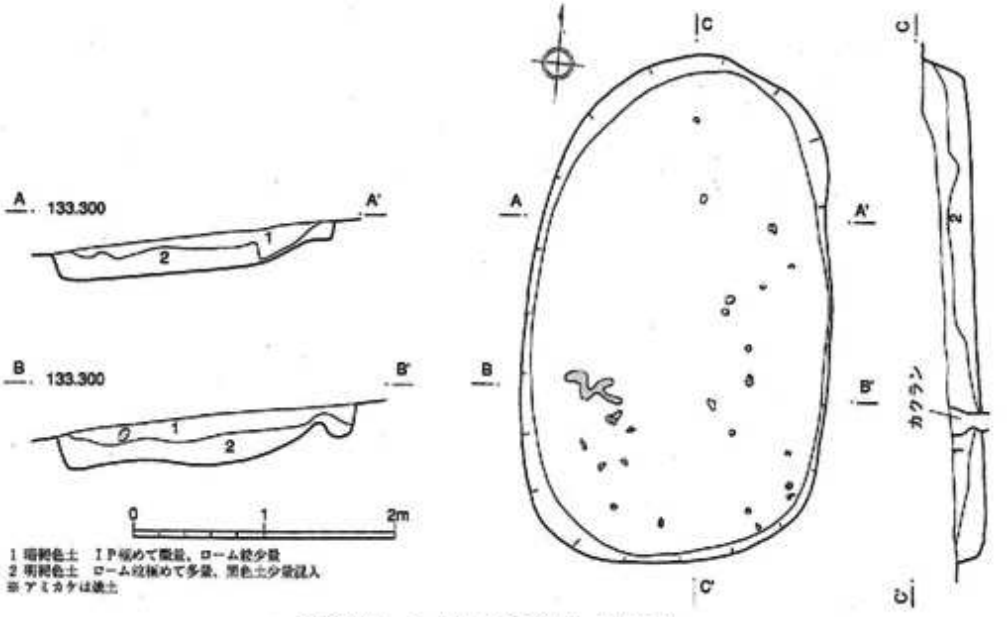
第２節　弥生時代

本遺跡において弥生土器は全部で21点出土している。個体数の内訳は壺形土器11点、甕形土器８点、蓋形土器と想定されるもの１点、器種不明１点である。

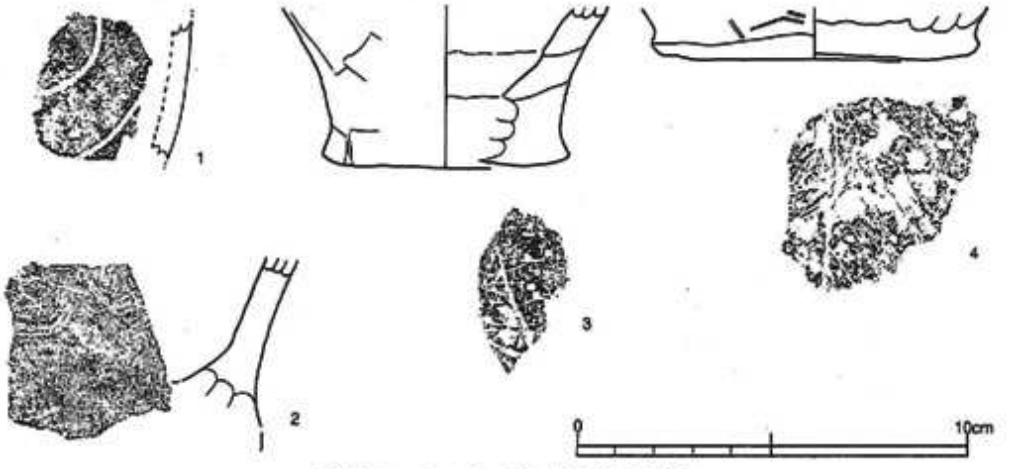
土器が確認された遺構は、SI02とSX01である。

(1)ＳＩ０２（第19，20図：図版７，８）

位置　調査区のほぼ中央（Ｃ－６グリッド）に所在。平面形　3.8m（南北）×2.4m（東西）の小判形。主軸　Ｎ３°Ｗ　壁　深さ約20～30cm。立ち上がりは約65～77°床面　ローム地山床で固くしまった面はなく、若干の凹凸を有する。南東部床面に焼土有り。住居埋土の状況　第２層は人為堆積の可能性があるが、第１層は自然堆積である。柱穴・周溝　無し。炉　無し。



第19図　ＳＩ０２遺構平・断面図

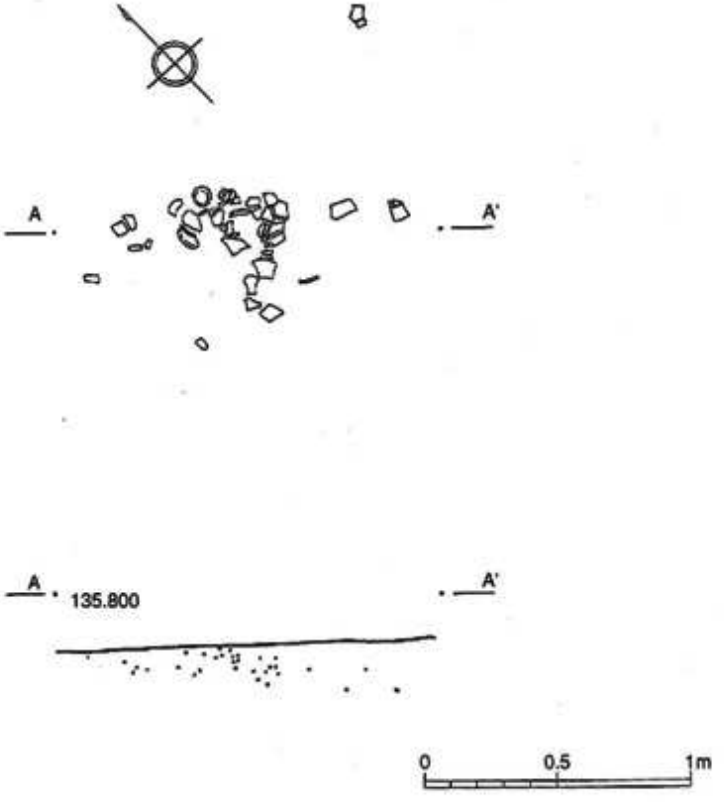


第20図　ＳＩ０２出土遺物実測図

第20図の１は壺形土器、２～３は甕形土器である。１はナデの後、櫛状工具による渦文が施される。内面は剥落しているため不明。白色砂粒、金雲母、赤色粒子を微量含む。２は底部付近であり、ナデの後、櫛状工具による弧文が施される。３と４は底部で、３は胴部がヘラケズリされ、底面には木葉痕がみられる。４は胴部にヘラ状工具による山形文が施されている。底面には木葉痕がみられる。

(2)ＳＸ０１（第21，22図：図版８）

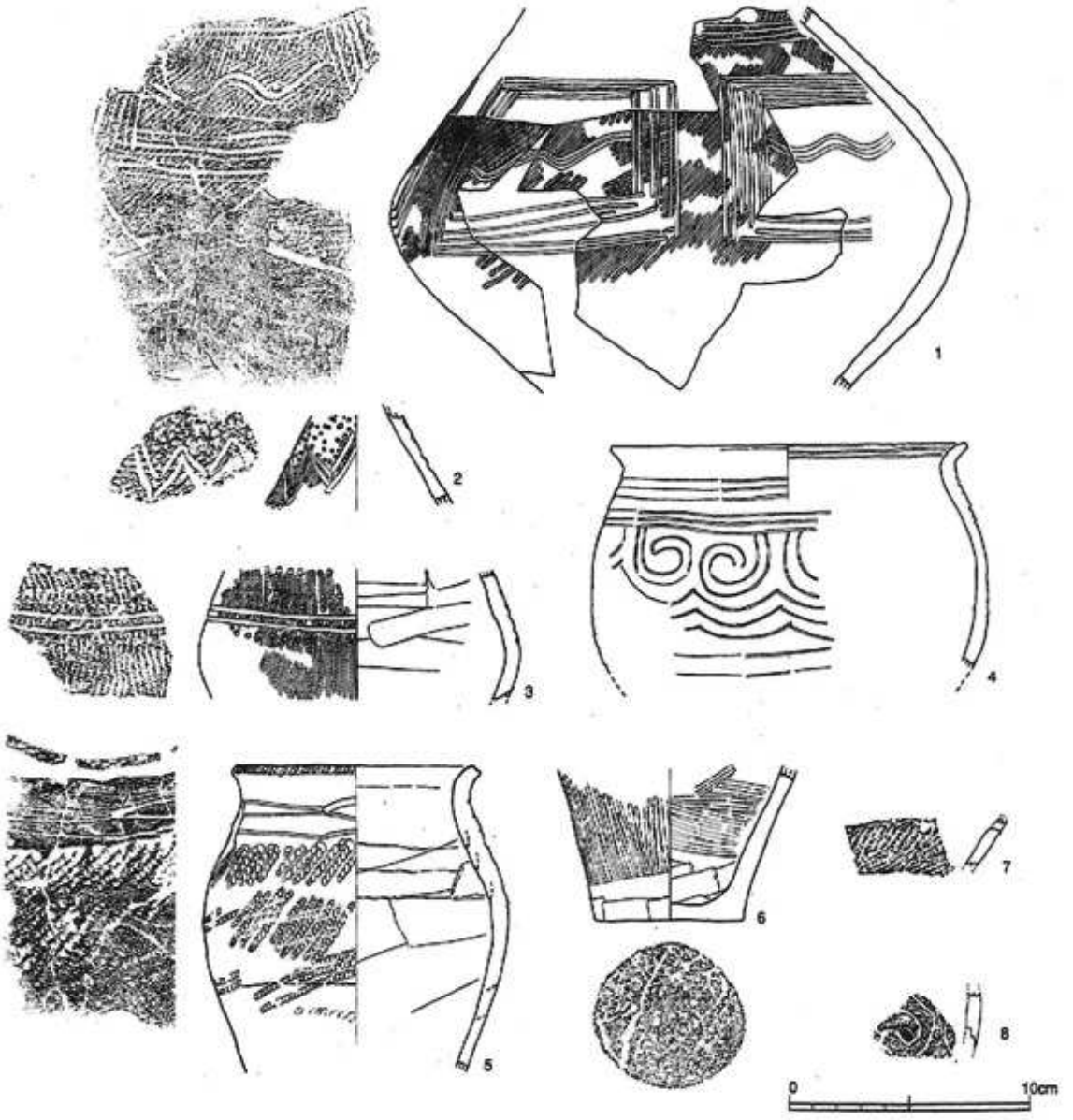
本遺構は南調査区北東角付近で、４号塚のすぐ北側に位置する。４号塚は北側を削平された地表付近を精査中に土器片の出土をみた。この位置は４号塚の直下にあたり、塚築造以前の遺構の存在があると思われる。しかし塚直下以外の排土を行うことができず、限定された箇所の表面観察では、遺構内に堆積した埋土と、地山黒色土との判別が困難であった。したがって、遺構の形態、規模等は不明である。確認された遺物に関しては、可能な限り実測して取り上げた。なお、遺物取り上げ後は精査・確認の意味で、さらに直下を20cmほど掘り下げを行ったが、遺構、遺物は確認されなかった。遺物は、近いレベルでまとまっており、原位置を保っていると思われる。　遺構の形態、規模は不明であり、本遺跡の性格を判断することは極めて困難であるが、遺物が日常雑器の類であることから、弥生時代の黒色土中で床が終束してしまう、竪穴住居跡であった可能性があると考えられる。



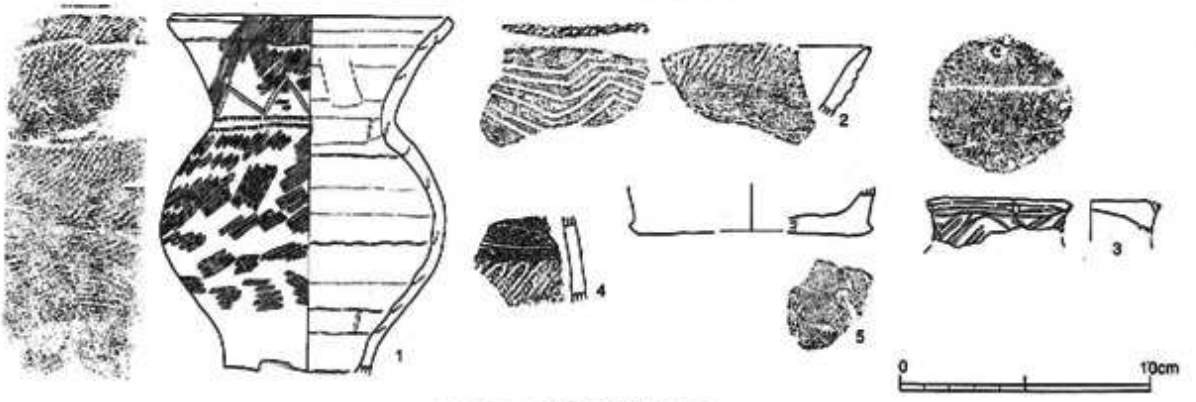
第21図　ＳＸ０１遺構平・断面図

第22図の１、２、３の壺形土器と４～８の甕形土器の７点が出土している。１は残存器高約16cmで胴部中位に最大径をもつ壺形土器である。文様は胴部上半を２段ＬＲの縄文を施した後に、頸部近くを４条の沈線で重四角文を描き、重四角文の中に２条の波状文を施す。４つの重四角文とその半分の重四角文１つを単位とする。半截竹管による平行沈線である。胴部下半はヘラケズリである。長石を多量に含む。２と３は復元最大径約13.5cmの壺形土器で、頸部は山形文が施されている。胴部は２段ＬＲを施文し、その後、２条の沈線に平行して刺突が上２列、下１列施される。２は表採であるが、３と同一個体と考えられる。黒雲母を多量に含む。４は甕形土器で復元口径が約15cmである。文様は頸部に３条の沈線が２段にめぐっている。胴部上半には相対する２つの渦文が１組になって文様を構成し、下に３本１組の連孤文、本来は３条と思われるが、２条の沈線がめぐる。沈線は１本づつ、右から左へ施され、２本の沈線間のミガキは磨滅が著しくて不明である。砂粒を多量に含む。５は甕形土器で復元口径約10cm、残存器高約13cmで、口唇部に原体による回転押圧がみられる。口縁～頸部は強いナデの後、３条の鋭いが直線ではなく、曲がった沈線をめぐらす。胴部には２段のＬＲの縄文が右方向に施されている。６は器種不明の底部である。外面の胴下半はタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキ、底部近くは内外面ともヨコ方向のヘラケズリが施される。外面には黒斑、底面には木葉痕がみられる。砂粒を多量含む。７は２段ＬＲをヨコ方向、内面はナデが施される。８は１本のヘラ状工具による渦文が施される。砂粒、白色砂粒を多量に含んでいる。

また、周辺より第23図の１の甕形土器が表採されている。１は甕形土器復元口径約11cmで、残存器高約14cm、底部を打ち欠いている。口唇部には原体による回転押圧、口縁部は２段ＬＲの縄文を施す。口縁から頸部は１本の山形文を浅い線でん右から左に描き、その下に櫛状工具による刺突文を２段に施す。胴部はナデ後、縄文を施している。２は壺形土器の口縁部で、復元口径約12.5cm、口唇部に原体押圧がみられる。外面は６条の、２本１組の沈線による山形文、内面の口縁部付近には２段ＬＲが施される。３は蓋形土器が天井部のみ残存し、１本のヘラで２条の沈線による山形文を施している。４孔有り。天井部から穿つ。天井は平坦で、木葉痕がみられる。砂粒、白色粒子、赤色粒子を多量に含む。４と５は甕形土器である。４は胴部で、２本の沈線の下に２段ＬＲが施される。５は底部で、木葉痕がみられる。



第22図　ＳＸ０１出土遺物実測図



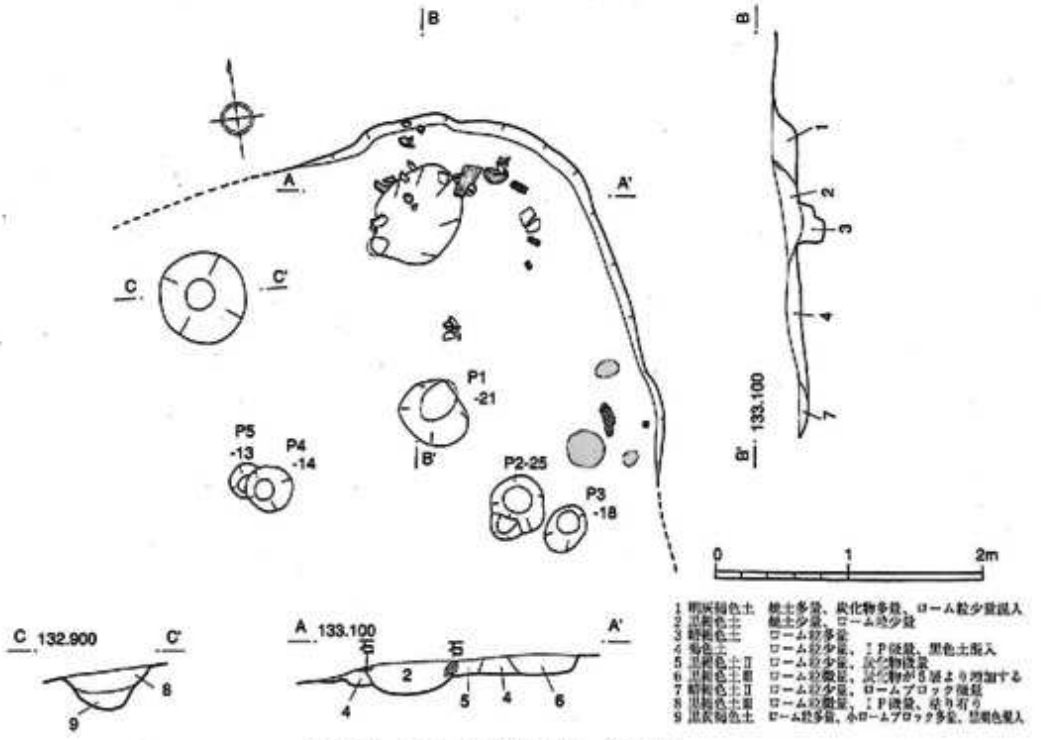
第23図　表採資料実測図

第３節　平安時代

平安時代の遺構は、残存状態が極めて劣悪な状況の竪穴住居跡１軒のみであり、遺物もその住居跡から甕の破片が少量出土したのみである。この遺構の立地箇所は、調査範囲の中では最も低地に存在し、土壌にかなりの湿度が認められる。駒生川上流域の旧湿地までさほど比高はないものと思われる。

(1)　住居跡

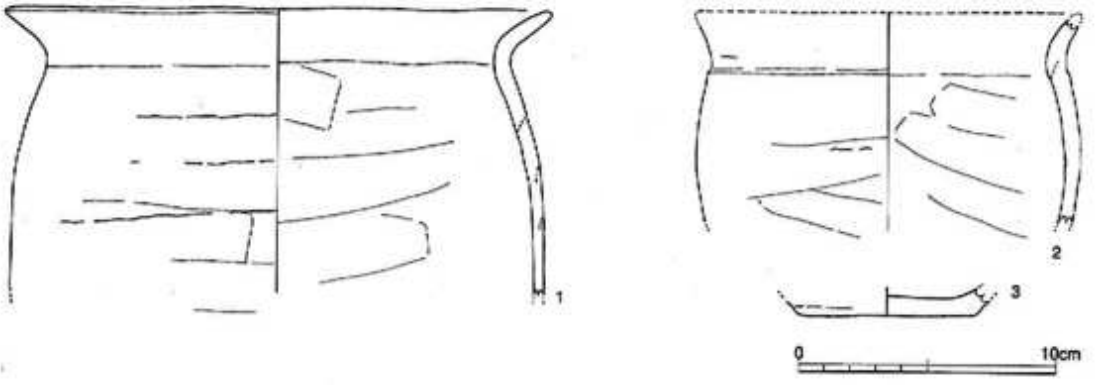
ＳＩ０４（第24，25図：図版９）



第24図　Ｓ１０４遺構平・断面図

<u>位置</u>　調査区の南西側（Ｄ－９～Ｅ－９グリッド）に所在する。<u>平面形</u>　不明。南西部の傾斜方向に向かって遺構が薄く、確認できなかった。残存する遺構は北壁 2.1×東壁2.6m部分のみ。の長方形を呈する。<u>主軸</u>　Ｎ９°Ｗ（推定）　<u>壁</u>　確認できた北壁で18cm、東壁で14cmである。なお各々南、西方向に向かって次第に浅くなり、最終的に消滅してしまう。立ち上がりは約50°～65°でやや緩やか。これは床から壁へ立ち上がる傾斜変換点付近にあたるためであると思われる。<u>床面</u>　ローム地山で張床は認められない。床下堀り込みは無いと思われるが、推定北東コーナー部付近にある直径約60cmの穴が、住居に伴う床下堀り込みか、独立した別の土坑かは不明。<u>住居埋土の状況</u>　一部に近年の攪乱があり埋土も薄いため、確認はできないが、埋土に大きなＬＢを含んだり、レン

ズ状の堆積をしていないことから、自然埋没の可能性がある。柱穴　住居内に数個のピットがあるが、上屋を推定できるような配置になっていない。周溝　無し。カマド　確認することは困難であるが、北壁の一部に凸状の煙道の掘り方と思われる窪みがある。また、この付近の埋土に焼土、炭化物が多量に混入することから、カマドである可能性が高いと思われる。ソデは確認できなかった。カマド堀り込みは大きく広がり周溝状の床下堀り込みに接続してしまう。カマド堀り込み付近には攪乱があり、被熱により変色した凝灰岩が散乱している。



第25図　Ｓ１０４出土遺物実測図

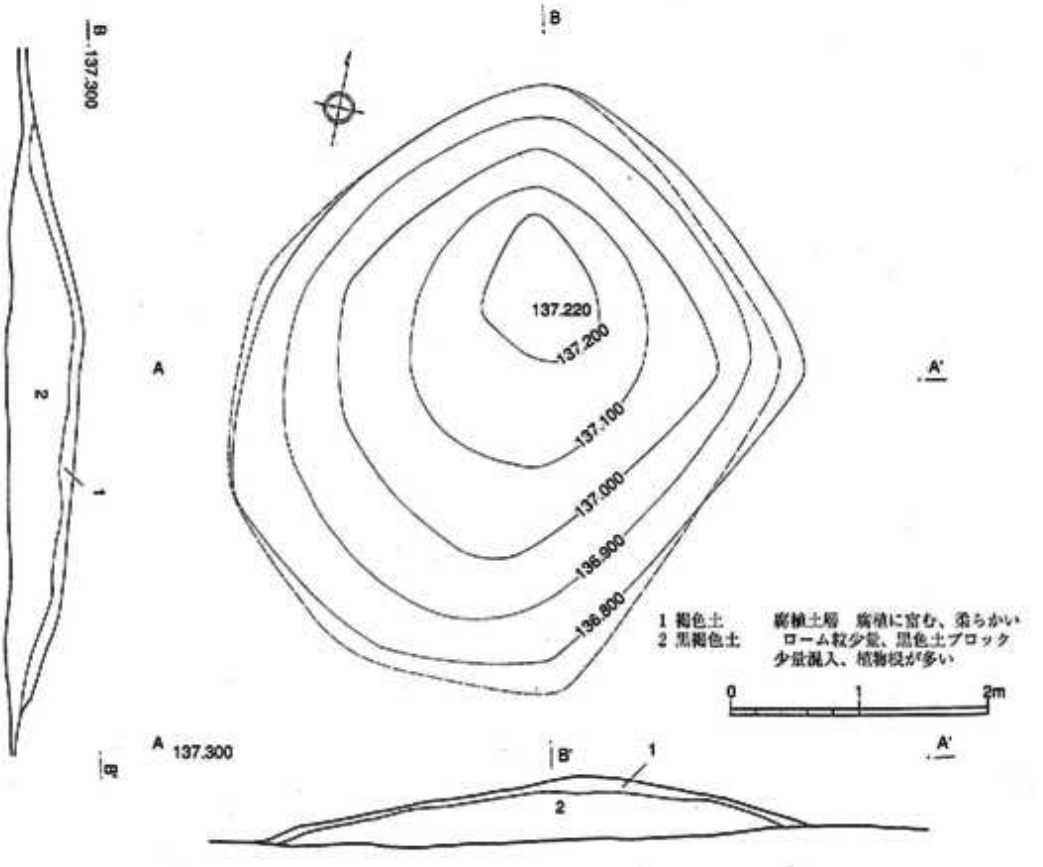
1は土師器甕で、口径21.2cm・残存高11cm。口縁部はくの字に外反し、肩部にやや膨らみを持ちながら胴部に至る。胴部は内外面とも横位のヘラナデで仕上げられている。2は土師器小型甕で、推定口径15cm・残存高8cm。口縁部は軽く外反する。3は土師器甕の底部で、底径は 6.8cm。土師器甕の特徴から10世紀前半頃のものと考えられる。

第4節　中近世

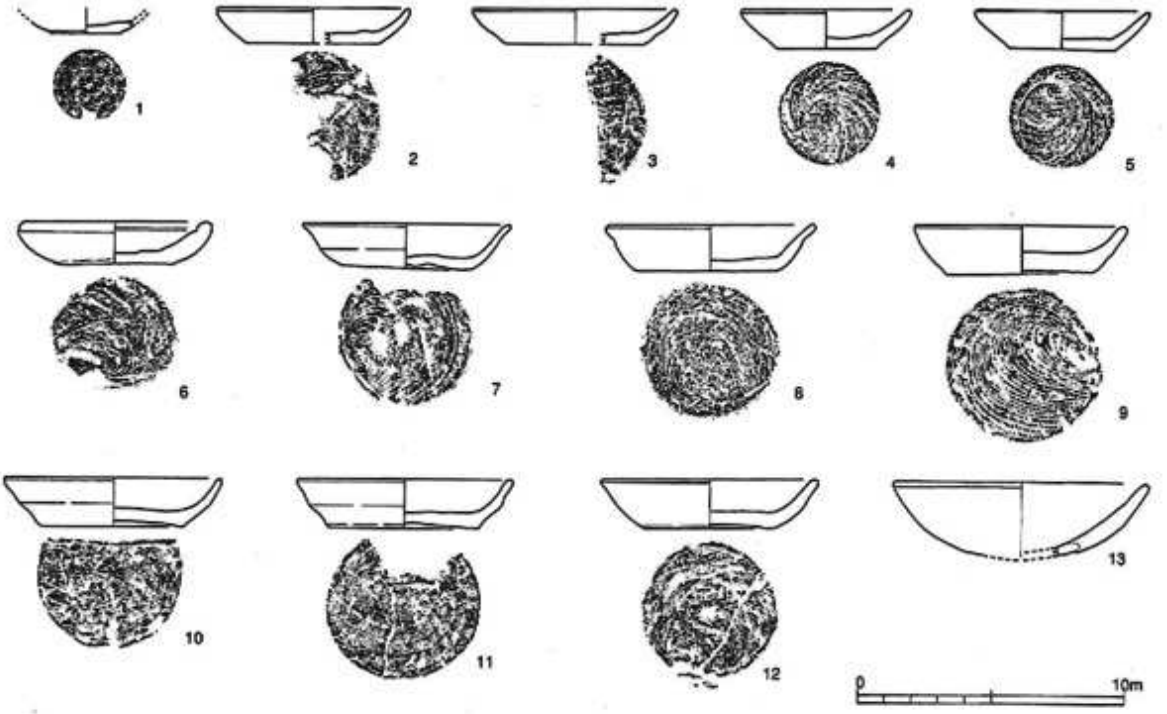
9基現存する高塚のうち、2基は後世のものであることが判明した。それを除外して分布を考えると北側2基と南側5基に分かれる。しかしすべての高塚は台地の南北を走向する分水界にそって西側に、やはり南北に連なって配置されている。

1号塚（第26，27図：図版10）

北地区、調査区の北端に位置する。この付近は調査区の中でも最も高く、標高 136.8mで、斜面は西と南へそれぞれ降りていく。形状は円形を呈するが、南東部斜面が直線的に急斜面になっており、後世に削除されたものと思われる。規模は東西4.52m×南北4.70mであり、比高は60cmと、規模の割りには低い。断面には版築状の堆積は確認できず、黒褐色土を周囲から集めて盛り上げたような、ラフな造りの印象がある。表面には約10cm厚の腐食土層が発達しており、盛土中には多量の樹木根、植物根が展張している。遺物は北西部裾部より土師器皿が13点出土した。これらの皿は表土である腐食土直下に分布しており、塚が築造された後に置かれたものであることから、これらの皿を用いてなんらかの祭祀に関する行為を行ったことが推測される。）



第26図　1号塚平・断面図



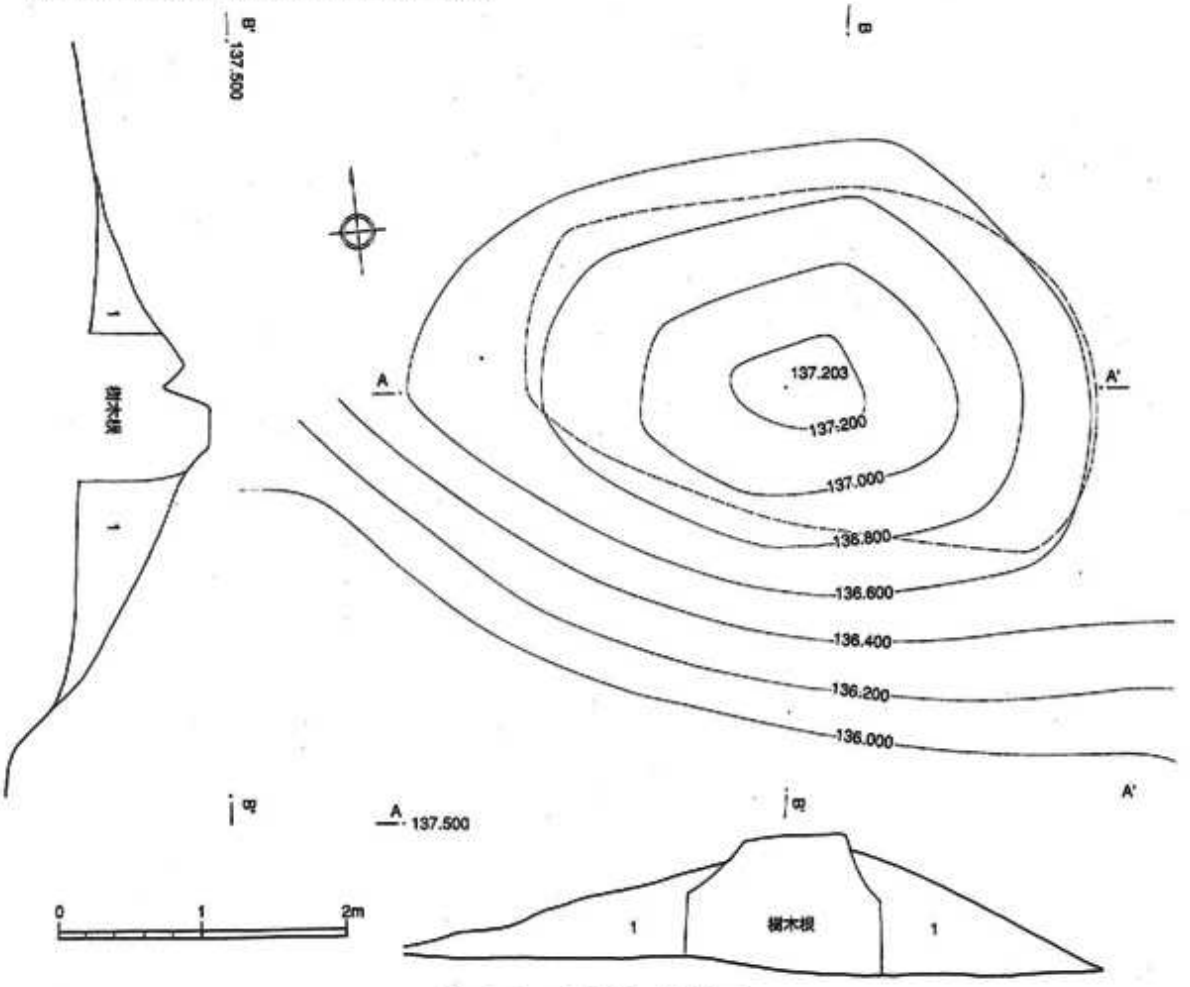
第27図　1号塚出土遺物実測図

No.	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	土師器皿	口 —— 高 —— 低 2.6	体部は外傾する。	ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	微砂粒	良好	南西裾	底部のみ残
2	土師器皿	口 (7.2) 高 1.3 低 (5.0)	体部は外傾し、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ヘラ削り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好	南西裾	1/2 残
3	土師器皿	口 (7.6) 高 1.3 低 (4.8)	体部は外傾し、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ヘラ削り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好	南西裾	1/3 残
4	土師器皿	口 6.4 高 1.5 低 3.8	体部は外傾し、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ナデ。	赤褐色	微砂粒、輝石	良好	南西裾	完形
5	土師器皿	口 6.6 高 1.45 低 3.9	体部は外傾し、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ヘラ削り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア輝石	良好	南西裾	完形
6	土師器皿	口 7.2 高 1.6 低 4.3	体部はやや内湾し、口縁部に至る。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ナデ。内面に一条の沈線がめぐる。	赤褐色	砂粒、輝石	良好	南西裾	完形
7	土師器皿	口 7.7 高 1.7 低 4.8	体部は外傾し、口縁部で、さらに外反する。	ロクロ成形、底部外面は回転糸切り、内面ナデ。	褐色	砂粒、金雲母輝石	良好	南西裾	3/4 残
8	土師器皿	口 7.9 高 1.7 低 5.5	体部は外傾し、口縁部で、さらに外反する。	ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ナデ。内面ナデ。	褐色	砂粒、金雲母輝石	良好	南西裾	法量完形
9	土師器皿	口 7.9 高 1.8 低 5.5	体部は外傾し、口縁部に至る。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好	南西裾	3/4 残
10	土師器皿	口 8.0 高 1.8 低 5.4	体部は一部外傾し、中位でやや直立する。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ヘラケズリ。	褐色	砂粒、赤色スコリア	良好	南西裾	2/3 残
11	土師器皿	口 8.0 高 1.8 低 5.0	体部は一部外傾し、中位でやや直立する。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ヘラケズリ。	褐色	砂粒、赤色スコリア	良好	南西裾	2/3 残
12	土師器皿	口 8.2 高 1.8 低 5.0	体部は外傾し、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ナデ。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好	南西裾	法量完形
13	土師器皿	口 9.6 高 —— 低 2.8	体部は外傾し、口縁部に至る。	非ロクロ成形。	乳白色	砂粒、金雲母	良好	南西裾	1/3 残

第4表　1号塚遺物観察表

2号塚（第28図：図版10）

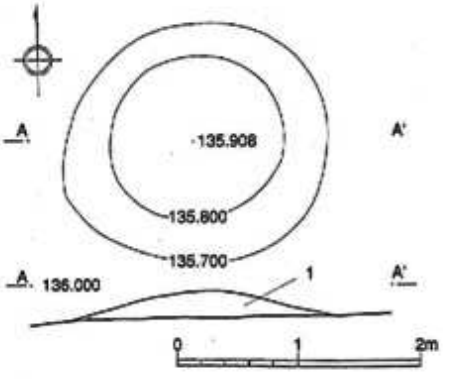
北地区、調査区の北端近くに位置する。調査区の最高地点から南西方向に斜面が落ち始める箇所にあたり、塚はいわゆる「山寄せ型」になっている。標高は 136.6mである。形状は東西方向の長楕円形で、長軸は斜面とほぼ平行で、N84° Wである。規模は長軸（東西）3.99m×短軸（南北）2.37m、比高は90cmで規模に割りには高く見える。断面には版築状の堆積は認められず、黒褐色土1層のみである。なお、高塚の頂上にコナラが立っていたため、その中央部は根により攪乱を受けている。盛土中よりの遺物の出土はなかった。



第28図　2号塚平・断面図

3号塚（第29図：図版10）

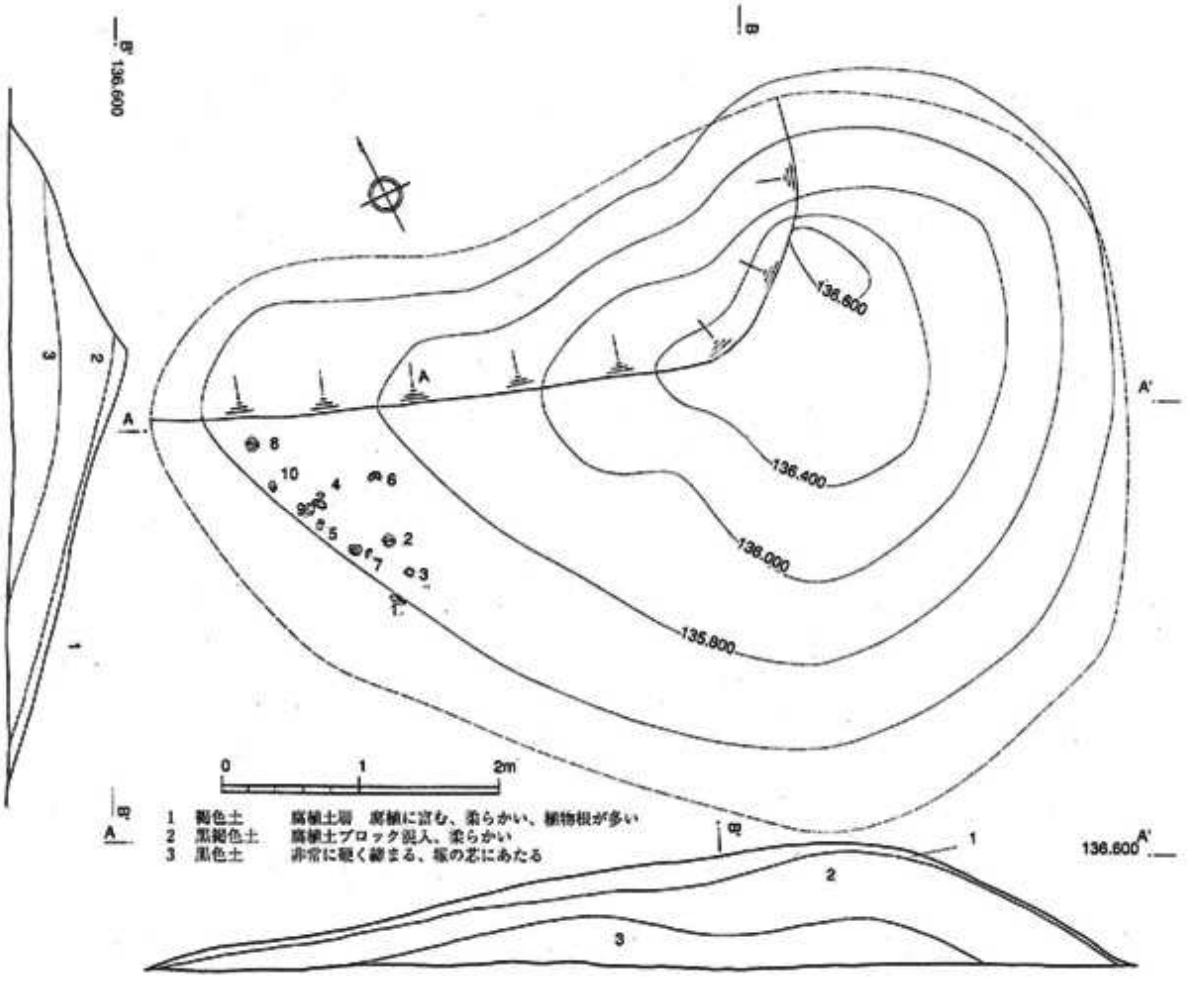
南地区、南調査区の北西端近くに位置し、基準標高は 135.7mである。形状は東西方向の短楕円形で、長軸は斜面とほぼ平行で、N60° Eである。規模は東西2.24m×南北2.02m、比高24cmと小規模である。小さな地膨れ程度の盛土で、雑草が繁茂する季節では、その発見は困難である。盛土中よりの遺物の出土はなかった。



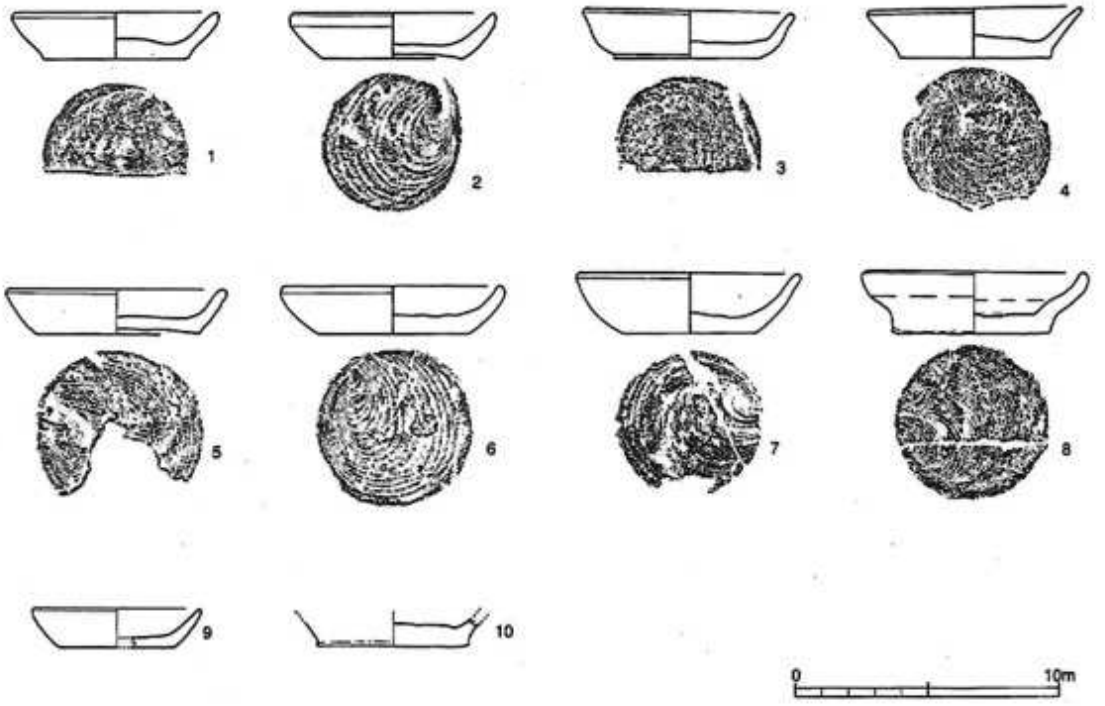
第29図　3号塚平・断面図

4号塚（第30，31図：図版10）

南地区、南調査区のほぼ中央に位置し、基準標高は 135.6mである。本遺跡中、最大規模の高塚である。形状は尖端部を西に向けた涙滴型を呈しているが、これは高塚の北西部を削平された結果である。尖端部はN77° Wである。規模は東西6.98×4.82m、比高87cmである。削平が行われなければ、直径８ｍクラスの高塚であったと思われる。土層は地表面に発達した腐食土層を伴い、中心部分は黒色土の硬く締まった土層（図中のNo３層）が認められる。これは盛土を堅固なものにするために、芯の部分にあたる盛土を叩き締めたものと推測できる。遺物は南西の裾野部より土師器皿が10点が出土している。皿はすべて表土直下にあり、同一レベルに分布している。このことから、塚の築造後、これらの皿を用いて何らかの祭祀行為を行ったことが推測できる。



第30図　４号塚平・断面図



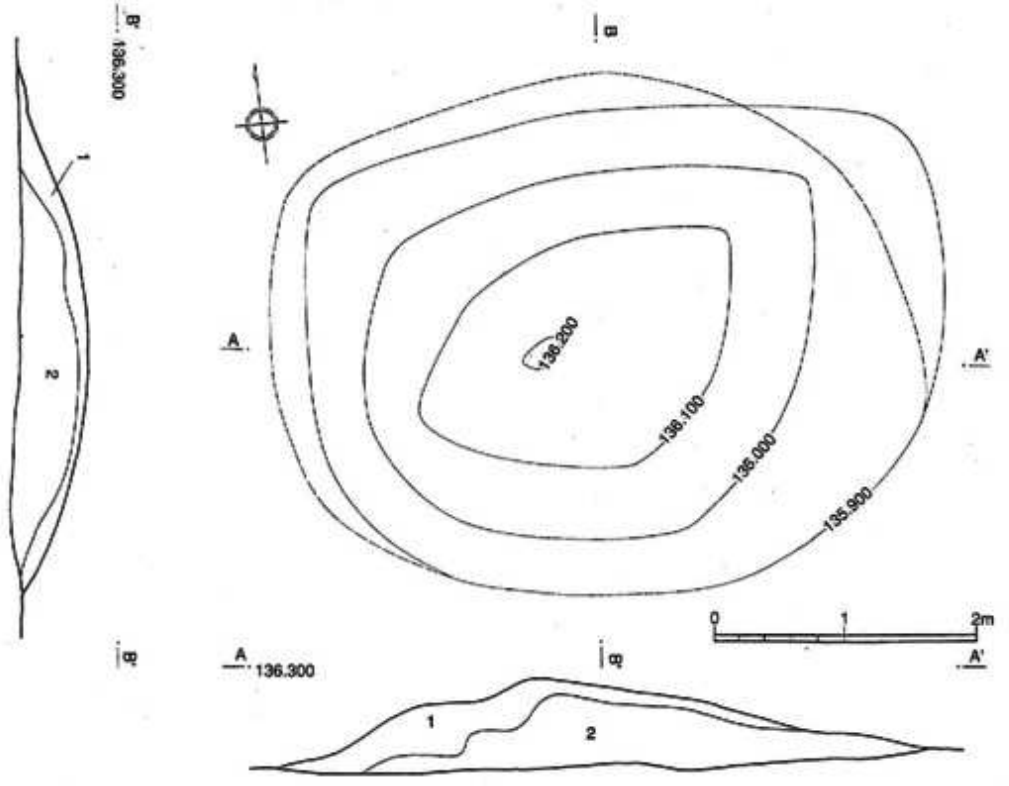
第31図　4号塚出土遺物実測図

No.	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調 釉調	粘土	焼成	出土位置	備考
1	土師器皿	口 7.8 高 1.8 底 5.3	体部は外傾し、口縁部に至る。	ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		1/3 残
2	土師器皿	口 7.9 高 1.7 底 5.1	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		ほぼ完形
3	土師器皿	口 8.0 高 1.8 底 5.6	体部は外傾し、口縁部で、さらに外反する。	ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。内面ナデ。	褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		1/2 残
4	土師器皿	口 7.8 高 1.8 底 5.3	体部は外傾し、口縁部に至る。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		ほぼ完形
5	土師器皿	口 8.4 高 1.8 底 5.6	体部は外傾し、口縁部に至る。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		1/3 残
6	土師器皿	口 8.5 高 2.3 底 5.0	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。内面ナデ。	褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		1/2 残
7	土師器皿	口 7.7 高 1.7 底 4.8	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ナデ。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		ほぼ完形
8	土師器皿	口 8.6 高 2.3 底 5.7	体部は一端外傾し、中位でやや直立する。	左回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	淡褐色	白色粒砂粒、輝石	良好		完形
9	土師器皿	口 6.3 高 1.45 底 4.2	体部は外傾し、口縁部に至る。	右回転ロクロ成形、底部外面は回転糸切り後ナデ。	赤褐色	白色粒砂粒、輝石	良好	南西区	1/2 残
10	土師器皿	口 高 底 5.7	体部は外傾する。	ロクロ成形、底部外面は回転糸切り。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア	良好		底部のみ残

第5表　4号塚遺物観察表

5号塚（第32図：図版11）

南地区、南調査区のほぼ中央、西寄りに位置し、基準標高は 135.4mである。形状は東西方向の楕円形で、規模は長軸4.94×短軸3.92mで、比高51cmである。図中の第2層は、ほとんどが大きな炭化物と新鮮な燃え残り樹木で占められている。現場付近の聞き取り調査により、昭和40年代中頃に行った、地元子供会のキャンプファイアーの消火跡であるということが判明した。土を被せて窒息消火した後、その地膨れを付近にある高塚に模倣して、残置したものであろう。

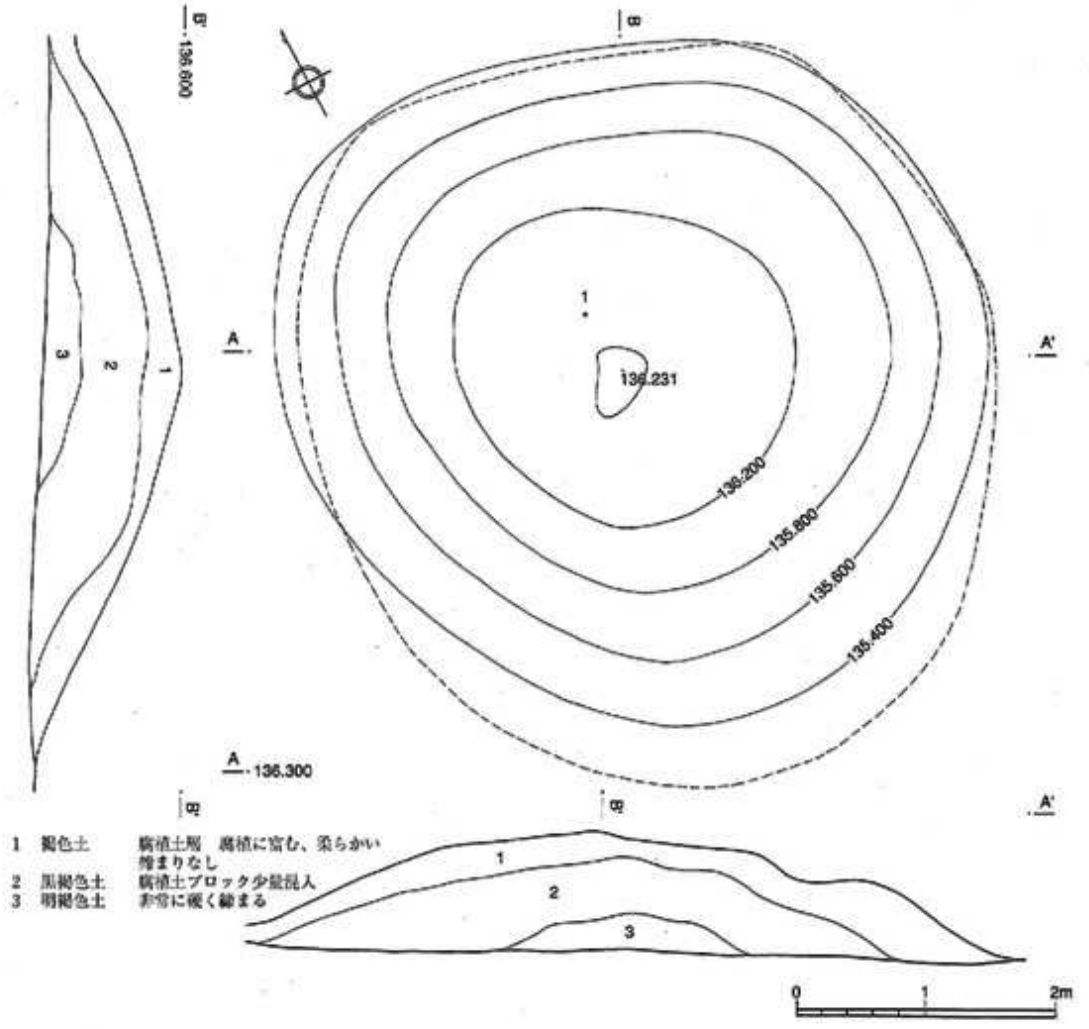


1　褐色土　　腐植土層　植物根による攪乱多い、締まりなし
2　炭化物層　　ガラス片、空き缶、菓子袋等ゴミ類混入
3　明褐色土　　腐植土主体、極めて柔らかい
4　炭化物層　　植物根による攪乱多い、締まりなし

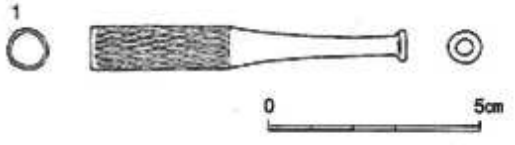
第32図　5号塚平・断面図

6号塚（第33，34図：図版11）

南地区、南調査区のほぼ中央、南寄りに位置し、基準標高は 135.2mで、本遺跡中第2の規模の高塚である。形状は洋円形で、規模は東西5.26m×南北5.63mであり、比高は90cmと最大である。土層は4号高塚同様、地表面に発達した腐食土層を伴い、中心部分は黒色土の硬く締まった土層（図中のNo.3層）が認められる。これは盛土を堅固なものにするために、芯の部分にあたる盛土を叩き締めたものと推測できる。盛土中よりの遺物は、1銅製キセル吸口である。



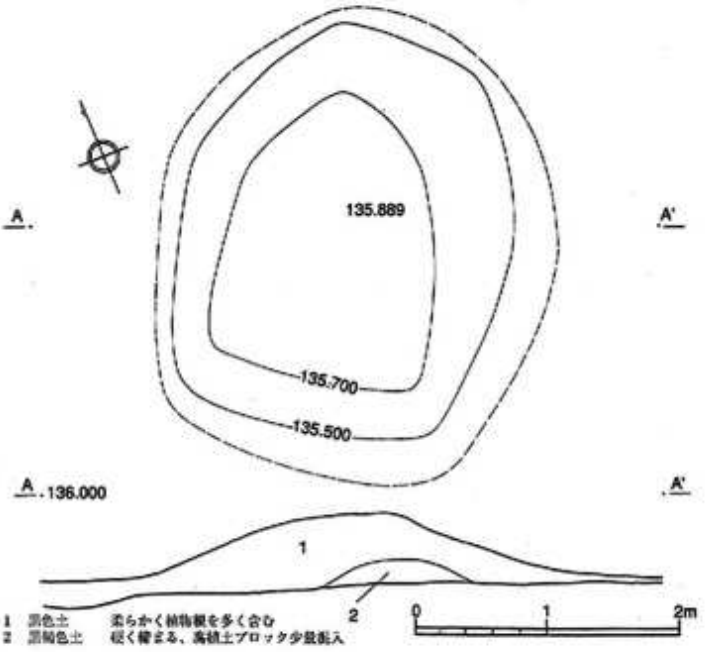
第33図　6号塚平・断面図



第34図　6号塚出土遺物実測図

7号塚（第35図：図版11）

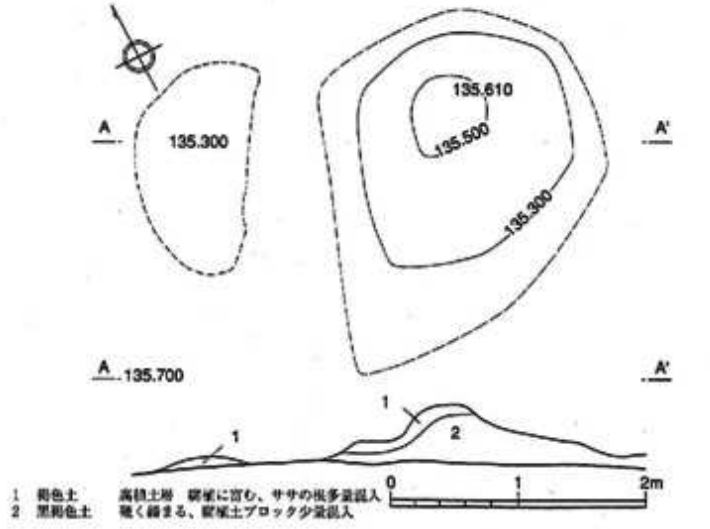
南地区、南調査区の東端に位置し、基準標高は 135.4mで、同様規模の8号塚と南北に並ぶように配置している。形状は南北方向の短楕円形で東西3.26m×南北3.50mの中規模で、比高54cmと、規模に比して高い印象がある。盛土のほとんどが根を多く含む柔らかい腐食土系の土であるが第2層の芯にあたる箇所は4号、6号塚同様の硬く締まった黒色土である。盛土中よりの遺物の出土はなかった。



第35図　7号塚平・断面図

8号塚（第36図：図版12）

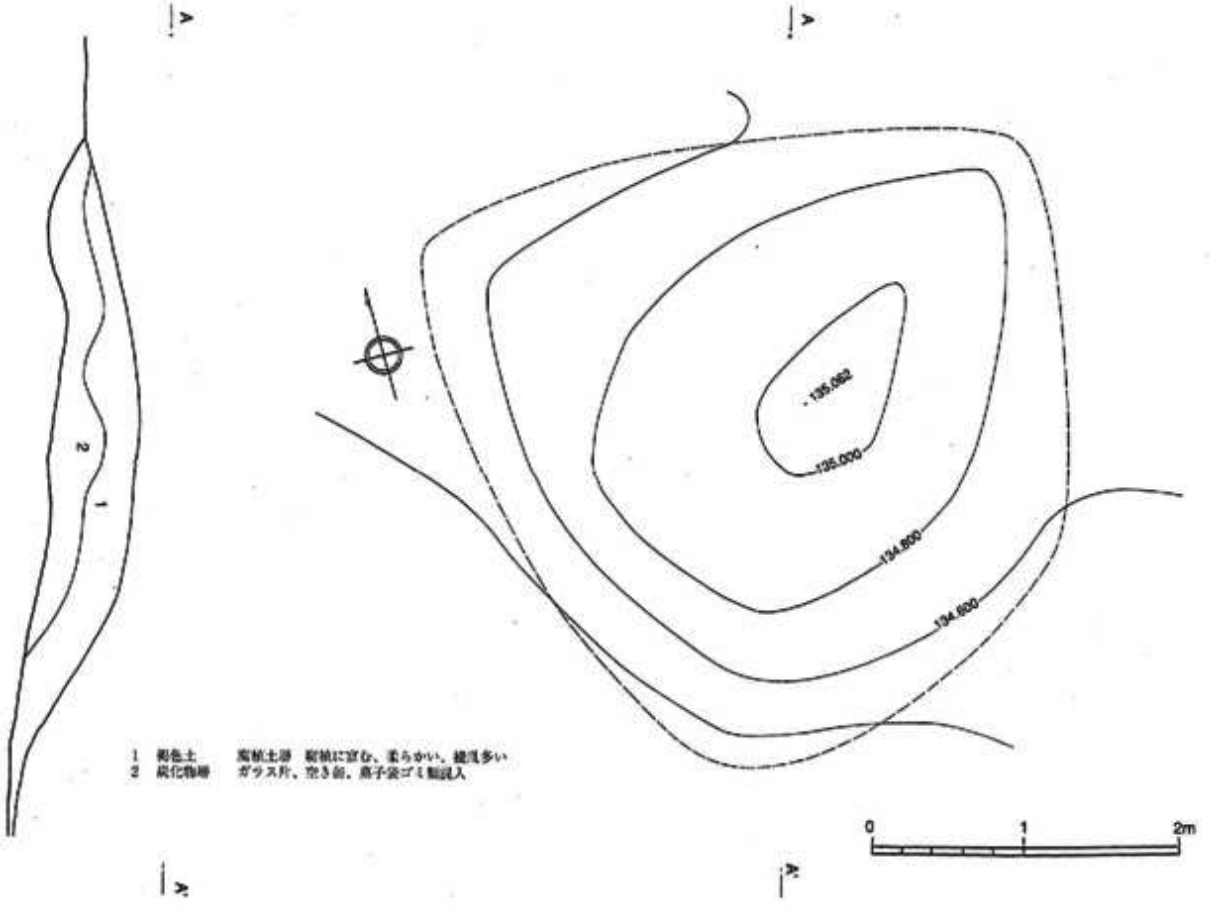
南地区、南調査区の東端に位置し基準標高は 135.2mで、同様規模の7号塚と南北に並ぶように配置している。形状は南北方向の短楕円形のものように見えるが、その西側に隣接する半月状の地膨れも8号塚の一部と見られる。これは高塚の盛土を南北に裂くようように削平した結果であり、そのため東側の短楕円形の塚と西側に半月形の塚に分離したものと思われる。東側の塚の規模は、東西2.19m×南北2.96m、比高46cm東側の塚の規模は東西0.86m×南北1.63m比高10cmである。削平される以前の規模を推測すると、東西約 3.6m、南北3mほどであり、並ぶように位置する7号塚とほぼ同規模になることは興味深い。なお、盛土からの遺物の出土はなかった。



第36図　8号塚平・断面図

9号塚（第37図：図版12）

南地区、南調査区の南西端近くに位置し、基準標高は 134.2mと、本遺跡の高塚群中で最も低位に占地する。調査区の平坦面から南西方向に急激に斜面が標高を下げる付近にあたり、塚はいわゆる「山寄せ型」になっている。形状は円形で、東西3.93m×南北4.50m、比高55cmである。図中の第2層からは、5号塚同様、大きな炭化物と、それに混ざってガラス瓶片、空き缶、菓子袋等が出土しており、これも昭和40年代中頃に行った、地元子供会のキャンプファイアーの消火跡であるということが判明した。



第37図　9号塚平・断面図

第５節　時代不明遺構

時代不明の遺構としては、土坑13基、溝跡２条が確認された。いずれも、時期と特定できるような特徴は認められなく、またこれらの遺構に伴う遺物に出土は認められなかった。

(1) 土　坑

ＳＫ０１（第38-1図：図版13）

Ａ－１グリッドに位置する。調査区の北西コーナーの近く。形状は東西方向の楕円形で角丸方形に近い。規模は長軸1.30ｍ×短軸0.92ｍであり、深さは69㎝、主軸はＮ59°Ｅを示す。断面は不規則な擂鉢状を呈し、西壁は開きながら立ち上がるが、東壁は不規則である。底部には不規則な凹凸があり、遺物の出土はなかった。

ＳＫ０２（第38-2図：図版13）

Ｂ－１グリッドに位置する。形状は北東部が突出する不定型円形で規模は1.45×1.40ｍ、突出部で直径短軸1.56ｍであり、深さは20㎝と開口部面積に比して浅い。壁は丸みをもって開きながら立ち上がる。底部はほぼ平坦で、遺物の出土はなかった。

ＳＫ０３（第38-3図：図版13）

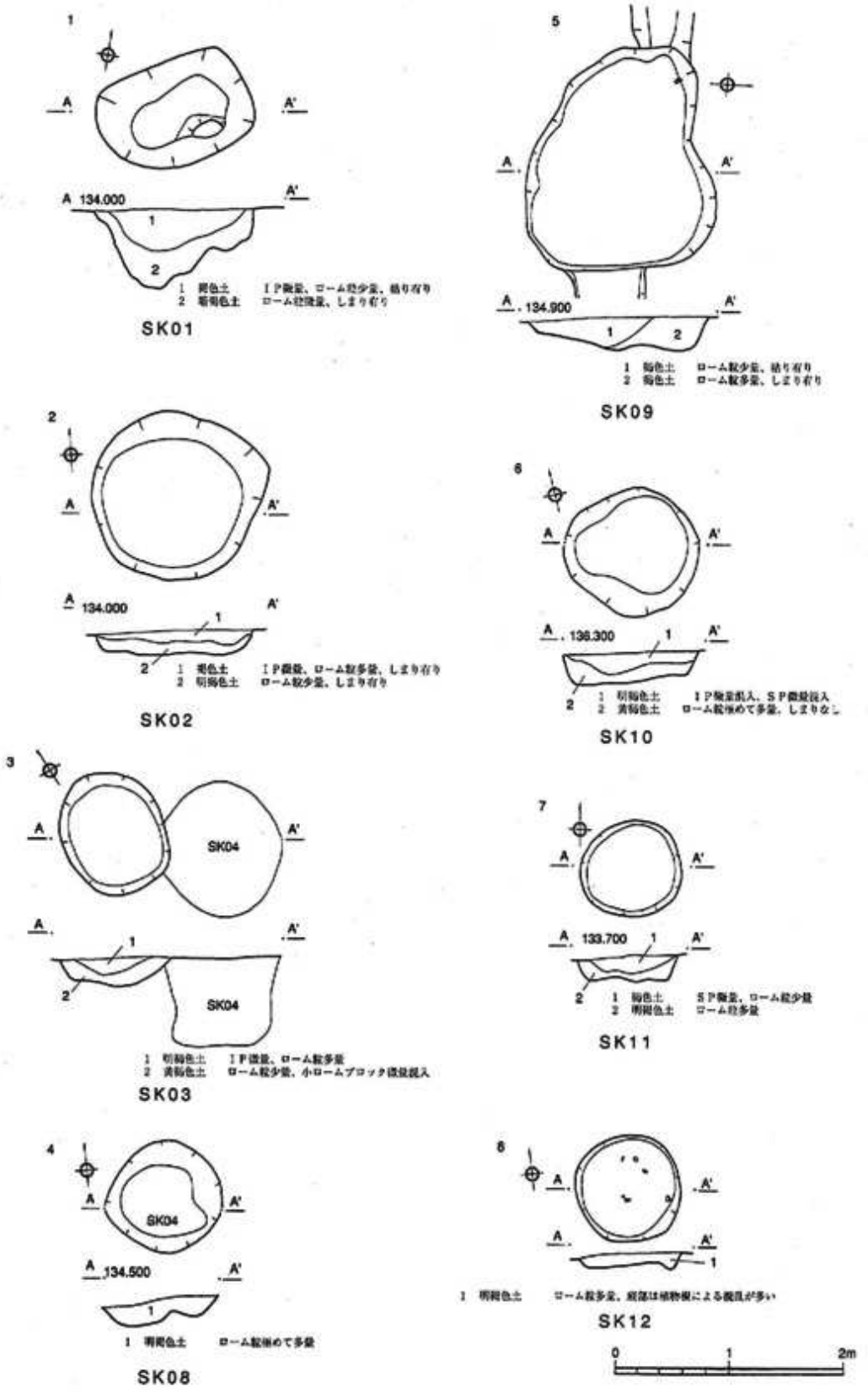
Ｂ－１グリッドに位置する。SK03を切る。形状は南北方向の短楕円形で規模は1.14×0.89ｍ、部で、深さは23㎝と浅い。西壁は開きながら立ち上がるが、東壁は緩やかなカーブをもって立ち上がる。底部は緩やかな凹凸を有し、遺物の出土はなかった。

ＳＫ０８（第38-4図：図版13）

Ｄ－２グリッドに位置し、調査区の西端近くにあたる。形状はほぼ真円形に近いが、西壁の一部に小規模な突出を有する。規模は0.98×1.03ｍ、深さ18㎝である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり、地山との境界はやや不明瞭である。底部は不規則に凹凸している。

ＳＫ０９（第38-5図：図版13）

Ａ－５～Ｂ－５グリッドに位置する。同様に時期不明である溝SD01を切っている。規模・形状は1.93×1.59ｍで不定型を呈し、深さは29㎝である。壁は急角度にて明瞭に立ち上がり、底面は不規則な凹凸がある。土坑の北西部、埋土上層に有蹄目奇蹄類の臼歯が１本出土している。



第38図　土坑平・断面図(1)

ＳＫ１０（第38-6図：図版13）

Ｄ－５グリッドに位置する。調査区の西端にあたり、形状は洋ナシ型であり、主軸はN76°Wを示す。規模は長軸1.18m×短軸1.11mであり、深さは西側で25cm、東側で20cmである。壁は急角度に立ち上がり、掘り込みは非常に明瞭である。底部は緩やかに凹凸を有し、遺物の出土はみられない。

ＳＫ１１（第38-7図：図版14）

Ｂ－５グリッドに位置する。形状はほぼ真円形に近く84cm×83cmの小規模で、深さは20～15cmである。壁は急角度で掘り込みは非常に明瞭である。底部は若干の凹凸がある。

ＳＫ１２（第38-8図：図版14）

Ｂ－６～Ｂ－７グリッドに位置し、SI03の南東約３ｍに位置する。規模・形状は真円形に近く小規模である。直径は約90cmで、深さは10cmと浅い。底面は不規則な凹凸がある。遺物は縄文土器片、土師器片を少量出土ずつ出土している。

ＳＫ１４（第39-1図：図版14）

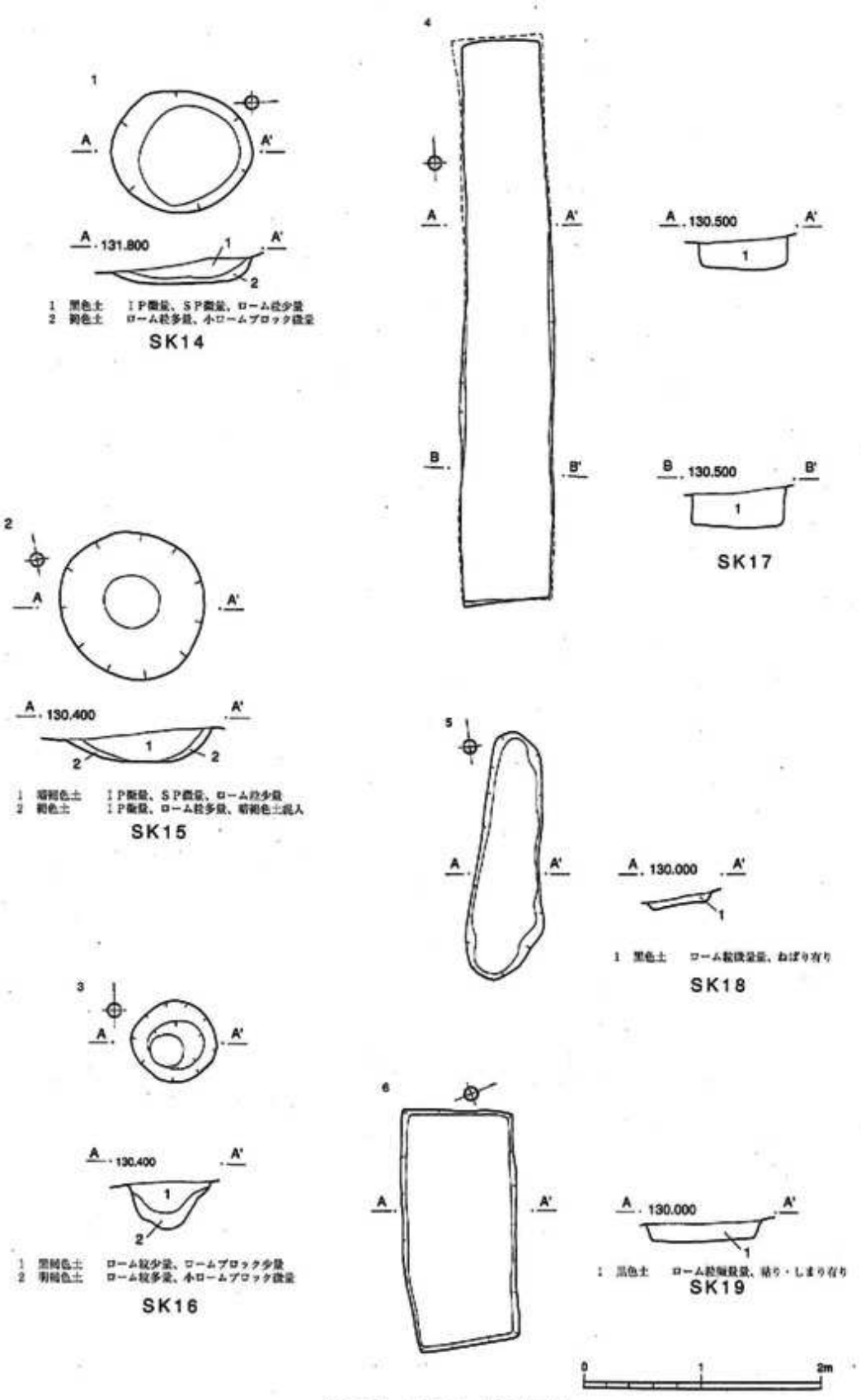
Ａ－９～Ｂ－９グリッドに位置する。調査区の南東コーナー付近にあたる。形状は南北方向の短楕円形で、規模は長軸1.16m×短軸1.00mであり、深さは東側で17cm、西側で11cmである。
東壁は開きながら立ち上がっており、西壁の立ち上がりが不明瞭で緩やかに徐々に立ち上がる。底面は全体的に平坦である。

ＳＫ１５（第39-2図：図版14）

Ｃ－９グリッドに位置し、SI03のすぐ南西側に隣接するが、SI03とは重複しない。形状は整美なほぼ真円形を呈し、規模は1.24m×1.18m、深さ26cmである。壁は緩やかで大きく開きながら立ち上がる。底部は開口部面積に比して小さめで、円形を呈し、ほぼ平坦である。

ＳＫ１６（第39-3図）

Ｆ－８グリッドに位置する。逆Ｌ字状を呈した調査区の最西端で、最低標高地点である。規模・形状は真円形に近く小規模で、直径約55cm、深さは39cmで、規模の割りには深い。壁は大まかに２段であるが不規則であり、開きながら立ち上がる。底面は小さく丸底で平坦面を有しない。



第39図　土坑平・断面図(2)

ＳＫ１７（第39-4図：図版14）

Ｅ－８～Ｅ－９グリッドに位置する。調査区の西端近くにあり、形状は南北方向の長方形である。規模は長軸4.67m×短軸0.79～0.72mであり、深さは西側で19～24cm、東側で24～32cm、主軸はＮ０°を示す。壁は垂直に立ち上がり、一部にオーバーハングがみられ、掘り込みは非常の明瞭である。また、底面は極めて平坦である。埋土はロームブロックを含む黒褐色土で人為埋没と思われる。農作業時に掘削されたイモの貯蔵用穴の可能性が高い。

ＳＫ１８（第39-5図：図版14）

Ｆ－９グリッドに位置し、調査区の最西端にあたる。形状は南北方向の長楕円形で、規模は南北2.12m、東西0.45～0.56mであり、深さは６cmと極めて浅い。底面はほぼ平坦であるが、南北方向に沿って中央が若干高い。壁は丸みをもって立ち上がる。

ＳＫ１９（第39-6図：図版15）

Ｅ－９グリッドに位置する。調査区の西端近くにあり、形状は東西方向の長方形である。規模は長軸1.95m×短軸0.96mであり、深さは15cmで規模の割りには浅い。主軸はN71°Wを示す。壁は急角度に立ち上がり、掘り込みは非常の明瞭であり、底面も極めて平坦である。埋土はローム粒を含む黒色土で自然埋没と思われるが、形状から推測して、農作業時に掘削されたイモの貯蔵用穴の可能性が高い。

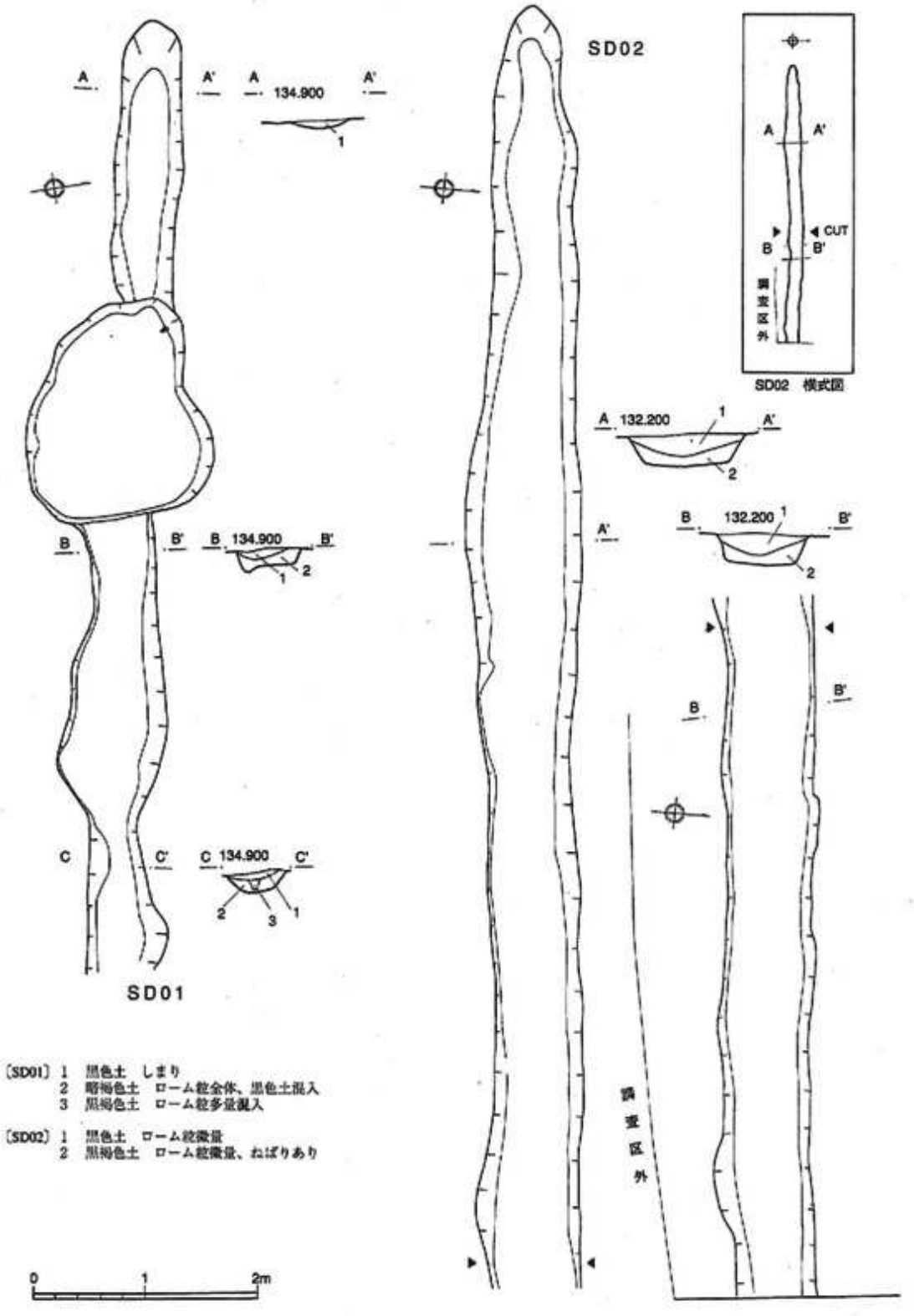
(2) 溝　跡

ＳＤ０１（第40図：図版15）

Ａ－９からＢ－９グリッドにわたって位置している。調査区のほぼ中央を、東（高位）から西（低位）へ向かって延びており、その先端は調査区の中央Ｃ－５グリッド付近で終束している。水路のように高低差があるが、断面には流水特有の砂のラミナ堆積が認められないことから、水路ではないことが確認できる。断面は逆台形状を呈し、樹木根の影響による凹凸以外は、ほぼ平坦な底面である。先端部近くをSK09に切られており、この土坑とは伴っていない。またこの溝跡に伴う遺物は認められなかった。

ＳＤ０２（第40図：図版15）

Ａ－９からＤ－10グリッドにわたって位置している。調査区の南側を、東（高位）から西（低位）へ向かって延びており、その先端は調査区の中央からやや西Ｅ－10グリッド付近で終束している。SI04、SK19に極めて近接する。SD01同様、水路のように高低差があるが、断面には流水特有の砂のラミナ堆積が認められないことから、水路ではないことが確認できる。断面は逆台形状を呈し、ほぼ平坦な底面である。また、この溝跡に伴う遺物は認められなかった。



第40図 SD01・02遺構平・断面図

第Ⅳ章　まとめ

御城跡遺跡は駒生川上流、源流域低湿地を望む第四紀台地上に立地し、縄文・弥生・平安期の土坑、住居等の存在が確認された。これらの遺構はいずれも緩斜面上に営まれており、台地上の平坦面になるとその存在は希薄となって、近世の高塚にその分布を譲るようになる。

縄文期の遺構は竪穴住居跡２軒、土坑６基であり、その出土遺物から後期前半に位置づけられると考えられる。

弥生期の遺構は竪穴住居跡１軒、未確認遺構１基であり、少ない出土遺物ながらも、中期後半に位置づけられると考えられる。

平安期の遺構で確認できたのは竪穴住居跡１軒のみで、遺物も極めて少なかったが、遺構に伴う土師器甕の特徴から、10世紀前半頃と考えられる。

近世の遺構は高塚７基であり、そのうち遺物が伴うのは３基である。うち２基からは、土師器皿が出土しており、その特徴から17世紀後葉あたりに位置づけられそうである。

その他、時期不明遺構として、土坑13基、溝２条が認められたが、その覆土の状況から、少なくとも現代のものではないことは確かであるが、それ以外の情報を得ることは不可能であった。

第１節　縄文時代の遺構について

確認された２軒の竪穴住居跡の平面形は、ほぼ円形を呈している。この特徴は一般に「前期は方形、中期は円形」や「後期の住居形は東日本が円形、西日本が方形」などと言われていることが、本遺跡の遺構にも該当するのか、検証を試みる。SI01の遺構の特徴は

①住居の掘り方はほぼ円形

②主柱穴は住居内に４本、東西南北に各１本ずつ。深さは15～20cmと比較的浅い。

③炉、出入口等の施設・構造は確認できない。

④遺物の出土はごく小さなものが少量で、時期の決定が不可能。

等である。これらの事項からでは、全く考察ができない。次にSI03の遺構の特徴は

①住居の掘り方はほぼ円形

②主柱穴は住居内に、そして壁に沿って弧状に並ぶ。深さは10～30cmの浅いものと、50～70cmの深いものと混在する。

③炉は住居のほぼ中心にあり、出入口と思われる施設（住居内床面に環状の溝）が南東部に存在る。

④出土した遺物は、ほぼ完形の土器（小型コップ形深鉢）をはじめ、堀之内１式に並行するものがほとんどで、また床面直上からの出土でもあることから、後期初頭と考えられる。

遺構の特徴からも時期は縄文後期で矛盾はないと思われる。

SI01の時期は依然不明のままであるが、規模、平面形はSI03とほぼ同じ特徴を備えているようであり、後述する付近の縄文期の土坑がやはり後期前半の可能性があるとすると、SI01もSI03や土坑と同様、そう離れた時期の住居ではないと思われる。そこで仮にSI01を同時期の後期前半としたときの、形態的特徴について一考察を試みることにする。

縄文中期の住居形は、北関東において中期前半には円形多主柱住居が主流であった。しかし、中期中葉になると、方形の4本主柱住居が増加してくる。これに対し南関東では円形4本主柱住居が中期前半の主流であるが、その後の中期中葉でも円形多主柱住居も多く存在する。すなわちこの縄文中期中葉（加曽利E1）以降に、この4本主柱住居が定着してくるわけだが、しかし、円形住居も後期に残るのである（石野・1992）。

縄文後期における住居形は、従来円形の住居の存在が主流と思われてきたが、方形の住居の存在も注目されている。その比率は関東で円形8に対し方形5であるといわれている。(前出・石野)

本遺跡で確認された2件の竪穴住居跡はすべて円形であるが、SI01は4本主柱、SI03は多主柱である。遺物の検討から称名寺・堀之内式期と考えられる時期と、その分布範囲である中部、関東に見られる円形、方形、4本主柱、多主柱が併存した典型的な集落であるということが言えよう。

第2節　弥生時代の遺物について

類例について

第22図の1の土器に文様が類似するものとしては埼玉県小敷田遺跡 198号土坑出土と第1号方形周溝墓出土の土器があげられ、 198号土坑出土の土器は胴部が球形を呈する壺で地文に1段Lの縄文を施文し、篦描き沈線により、頸部は2条の山形文、胴部は重四角文を2段ずらして区画し、2条の波状文を施している。第1号方形周溝墓出土の土器は、胴部から頸部にストレートに移行する壺で地文に1段Lの縄文を施し、2段に分かれる5単位の重四角文で下段の重四角文の中に縦3条の波状文を施し、1つの中心の重四角文の中には横2条の波状文を施す。

埼玉県池上遺跡1号環濠出土の土器は、口縁部から頸部にかけてと胴部上半に、3単位の長方形に区画している。地文は偽縄文で区画内、縦に施文されているところは、沈線の方が後から施文されている。

栃木県御新田遺跡B区gグリット出土の土器は、胴部中位に最大径をもつ壺で、重四角文で区画し、区画内を1段LRの縄文で充填する。重四角文の中の沈線の数は5から7本の間である。胴部中位以下は無文である。本遺跡の壺形土器は縄文を地文とし、単位文様をつけた土器群の中に位置づけられる。5遺跡の時期とそれほどの時期差はないと思われるが、文様、器形からみても池上遺跡より後の御新田遺跡の時期とほぼ同じであると考えられる。

第22図の4は器形は違うが文様構成の類似から3例をあげられる。

栃木県中小代遺跡出土の長頸壺形土器。頸部の上下に１本の篦状工具による平行沈線が施され、胴上部には渦文が５単位施されているが余白部に渦文を意識した文様を施す。渦文の下には重連弧文と三角文を描き出している。胴下半は２段ＲＬの縄文が施されている。

栃木県岩崎遺跡出土の鉢形土器。２本１組の篦状工具で口縁部には平行沈線文と連弧文、胴上部には渦文と重連弧文を平行沈線が挟んでいる。胴下半には縄文が施してある。

福島県川原町口遺跡出土の土器は、２本１組の篦状工具で平行沈線の下に渦文、重連弧文が施される。器形がちがうが文様構成が似ており、同じ系譜のものと思われる。

本遺跡の甕形土器は東北南部との関わりが考えられる。福島県会津地方の二ッ釜・川原町口式にみられる渦文と平行沈線をモチーフとした文様が施され、その影響の下で出現してきたと想定される中小代遺跡や岩崎遺跡の土器と時間差のあまりない土器であると考えられる。

第23図の１は後期へと続く時期のものと捉えられる。

折り返し口縁と胴部に縄文を施文し、頸部に篦状工具による山形文を施している例は、上山遺跡の甕形土器が一番類似している。上山遺跡の土器は口縁部は緩やかに外反し、複合口縁で、口縁部と胴部に縄文が施されている。篦状工具による刺突文、平行沈線文、山形文が組み合わされている。刺突文は口辺部に２列、頸部～胴部に１列、平行沈線文が３条、山形文が３条、３本１組の篦状工具により施されている。

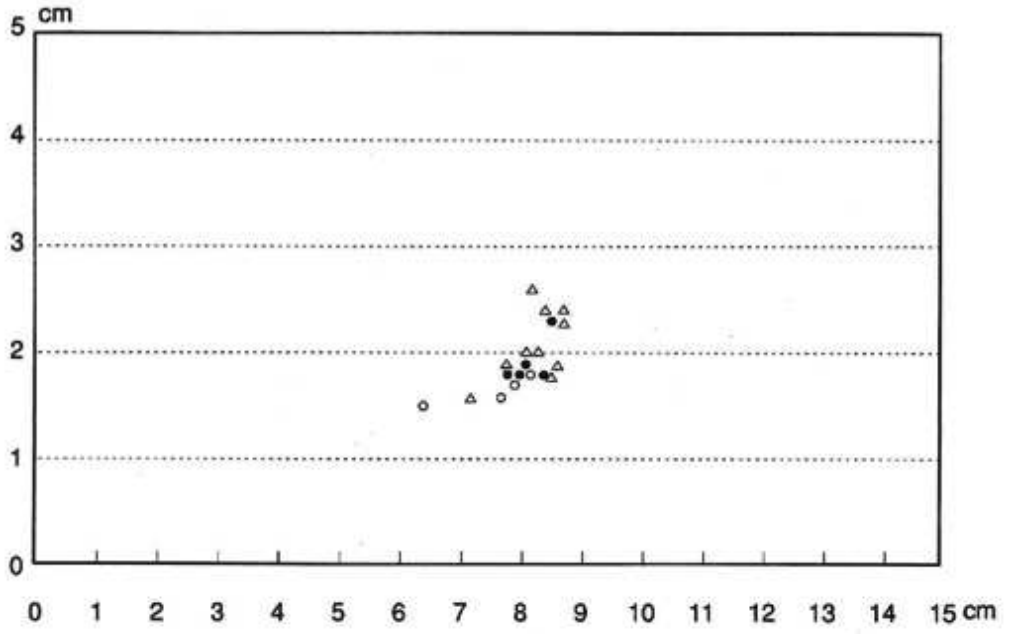
富士前遺跡出土の土器は、折り返し口縁で口縁部と胴部に縄文を施す。烏森遺跡出土の土器は富士前や上山の土器よりは若干あとのものであるが後期へと続く土器を考える上で重要であり、忘れてはならない土器である。

本遺跡出土の土器は弥生時代中期後半に位置づけられよう。土器の特徴としては東北地方南部の平行沈線文系の土器と南関東地方の須和田系の系譜を引く土器、後期二軒屋式の要素を持った土器が伴出する。中期後半という時期は、周辺の土器の要素を取り込み、後期へと続く時期である。平行沈線文と波状文の区画が終焉する時期がその時期であると考えている。

第３節　土師器皿について

今回の調査区内には９基の高塚が存在し、１号高塚と４号高塚より土師器皿が、６号高塚からはキセルが出土した。ここでは、この内の土師器皿についての時期について若干の検討を加えてみる。

１号高塚からは13枚、４号高塚からは10枚の計23枚の土師器皿が出土した。これらの口径と器高を基に法量を比較したものが第６表である。これを見るとわかるように、口径8～9cm 、器高2cm 前後にドットが集中する。本遺跡の周辺で同様の法量を示す遺跡として稲荷塚１号墳例が挙げられる。稲荷塚１号墳自体は古墳時代の所産であるが、その後も信仰の対象となっていたものと考えられ、墳頂部から土師器皿（報文中は土師質土器）が20枚出土している。そのうちの２枚の土師器皿の中に計14枚の寛永通宝が入った状態で出土した。このことから、この土師器皿の年代は江戸時代のものと判断される。よって、本高塚出土の皿も同様の時代のものと位置づけることができる。



第６表　御城跡遺跡出土土師器皿法量比一覧表

凡例
○１号塚
●４号塚
△稲荷塚

次に、もう少し細かく検討を進めるために、簡単な分類を行ってみる。
本遺跡出土の土師器皿はその器形の特徴から以下の5つに分類することができる。

Ａ非ロクロ系 (第27図13)
Ｂロクロ系
１　体部が一端外傾し、中位で外反するもの。(第27図8)
２　体部が一端外傾し、中位で直立するもの。(第27図11)
３　体部が外傾し、口縁部に至るもの。(第27図9)
４　体部が内湾し、口縁部に至るもの。(第27図6)

尚、B3・B4類は、内面無調整で、色調が赤褐色という共通項が挙げられる。

１号高塚はＡが１、B1が２、B2が２、B3が４、B4が３である。４号高塚はB1が１、B2が１、B3が４、B4が３である。１号にＡ類が含まれる以外は構成的にはほぼ同様の内容と言える。但し、内容をもう少し細かく見ると、底部外面調整と、法量及びロクロの回転方向に若干の違いが見られる。底部外面調整は、１号は回転糸切り後にナデたり削りを入れたりするものが見られるのに対し、４号はほとんど回転糸切りのままである。法量は、第６表からも分かるように、１号に比べ４号の方

が器高が高い。そしてロクロの回転方向は1号が右回転が多いのに対し、4号は左回転のものがほとんどを占める。

土師器皿の変遷については、その生産体制の関係から地域性の強いものであるため、各地域毎の変遷案の検討が必要との指摘があり、一概に他地域との比較をすることの問題はあるが、一方では、広域的な技術の交流などによる共通性と考える。そこで、当時の中心である江戸出土土器についてみてみる。

佐々木彰氏は、東大病院地区出土資料を分析し、17世紀中葉が底径が大きく器高が低い右回転ロクロ成形のものから、17世紀後葉には、底径が大きく、内湾気味の左回転のものが主体を占めるようになると指摘している。(佐々木 1990)

さらに、それを受けて小林謙一氏は、近世江戸土師器皿の段階設定をされ、江戸皿第3段階に非ロクロ製品の激減とロクロ回転方向が左回転が主体となるとの指摘をしている（小林1992）。因みに江戸皿第3段階は17世紀中～後葉に位置づけられている。

前述したように、稲荷塚例との法量比較から、1号及び4号塚の年代は、17世紀中葉以降であり、また、4号塚が左回転主体であることから、17世紀中～後葉とすることができる。また、1号塚には非ロクロが見られるのに対し、4号塚では見られず、調整も無調整のものが多くなることから、1号塚→4号塚という変遷が考えられる。

尚、1号塚出土土師器皿においても、16世紀代に位置づけられる石那田館跡出土のものと比べて、形態的な違いが見られることから、1号塚も近世的は土師器皿と位置づけられる。

これらの用途については、灯明具的な痕跡が見られないことから、高塚への供献用に使用されたものと考えられる。

（参考文献）

石野博信　1992　『日本原始・古代住居の研究』

小林謙一　1992　「Ⅲ-3　皿形土器類」『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』
江戸陶磁土器研究グループ

佐々木彰　1990　「江戸時代のカワラケの動態と推移－大聖寺藩上屋敷跡出土の資料を中心に－」
『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

藤田典夫ほか　1987　『稲荷塚・大野原』（財）栃木県文化振興事業団

図　版

①確認調査風景（東より）

②調査区全景〔表土除去時〕（北西より）

①調査区全景〔調査終了時〕（北東よりSI01,02,03を望む）

②調査区全景〔調査終了時〕（南西より SI04,03を望む）

①S101　断面（西より）

②S101　完掘状態（東より）〔右側はSK07〕

①S I 0 3　遺物出土全景（南西より）

②S I 0 3　生活面出土状況（南西より）

①S103　炉近景（南より）

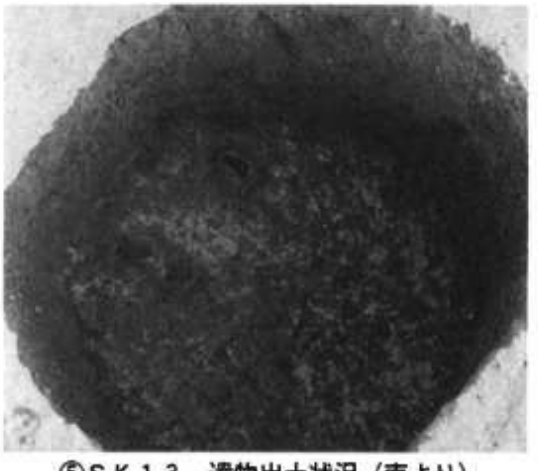
②S103　出入口と炉近景（北より）

①ＳＫ０４　遺物出土状況（南より）

②ＳＫ０５　完掘（南西より）

③ＳＫ０６　断面（西より）

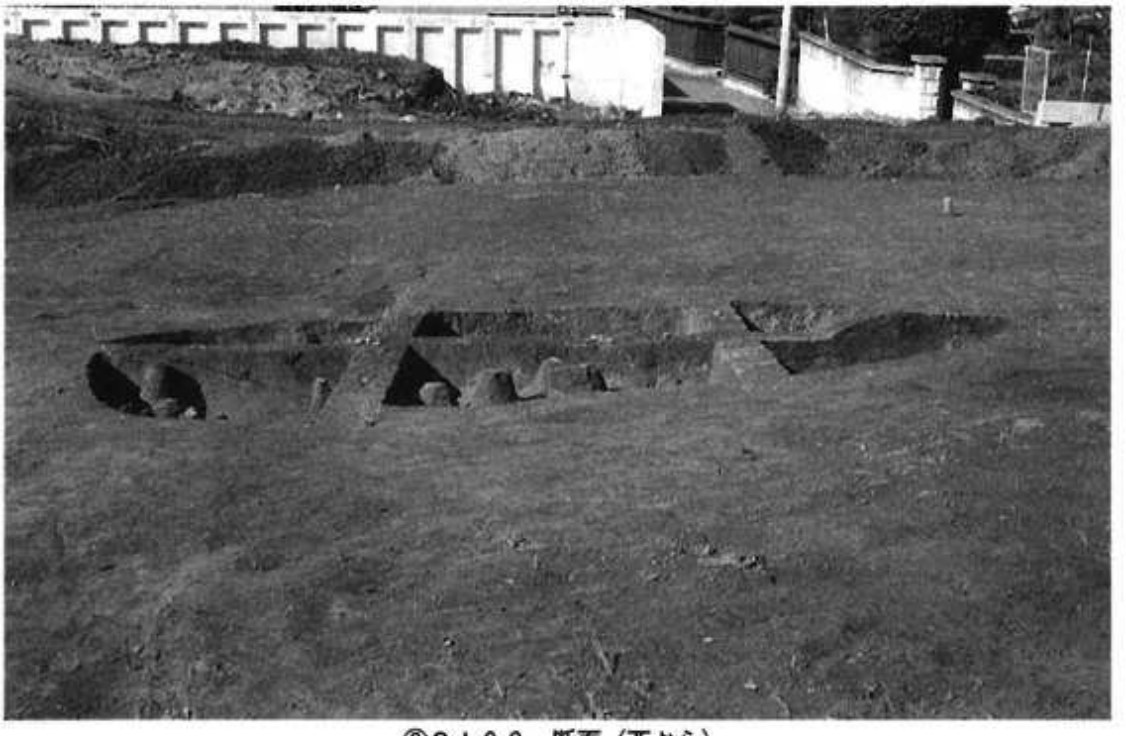
④ＳＫ０７　遺物出土状況（南より）



⑤ＳＫ１３　遺物出土状況（南より）

⑥ＳＫ２０　完掘状況（南東より）

①SI02　断面（南から）



②SI02　断面（西から）

①ＳＩ０２　遺物出土状況（南より）

②ＳＸ０１　遺物出土状況（南より）

①S104　全景（南東より）

②S104　遺物出土状況（南東より）

①１号塚断面（南東より）

②２号塚全景（南東より・右側は１号塚）

③２号塚断面（北西より）

④４号塚全景（南東より）

⑤４号塚断面（南東より）

⑥４号塚遺物出土状況（西より）

①5号塚（左奥・6号塚（右）全景（南より）

②5号塚断面（南東より）

③6号塚断面（南東より）

④6号塚遺物出土状況（南西より）

⑤7号塚全景（南より）

⑥7号塚断面（南より）

①8号塚全景（南より）

②8号塚断面（南より・遠景は7号塚）

③9号塚全景（南より）

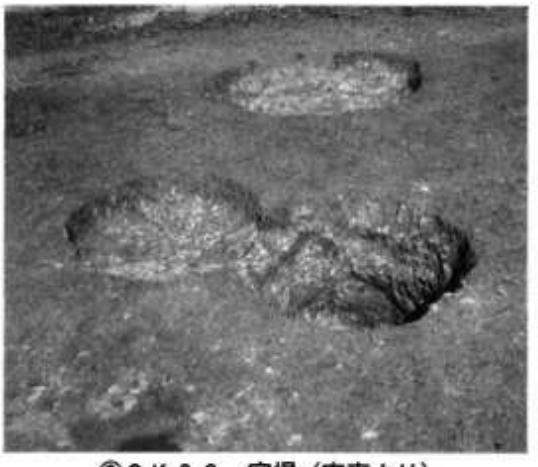
④9号塚断面（南より）

⑤S I 0 3　調査風景（東より）

⑥塚部調査遠景（南より）

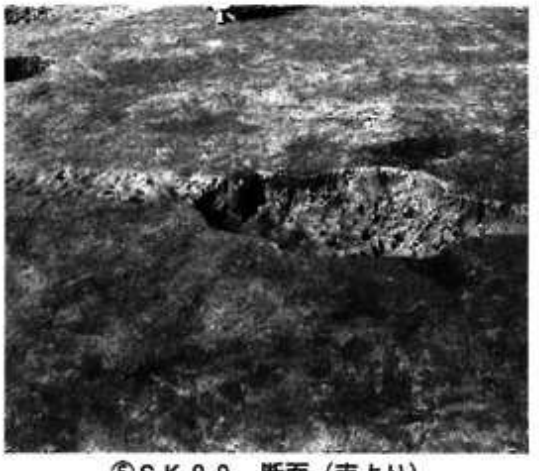
①ＳＫ０１　完掘（南西より）

②ＳＫ０２　完掘（南西より）



③ＳＫ０３　完掘（南東より）
〔奥はSK02, 右手前はSK04〕

④ＳＫ０８　断面（南より）



⑤ＳＫ０９　断面（南より）

⑥ＳＫ１０　断面（南より）

①ＳＫ１１　完掘（南東より）

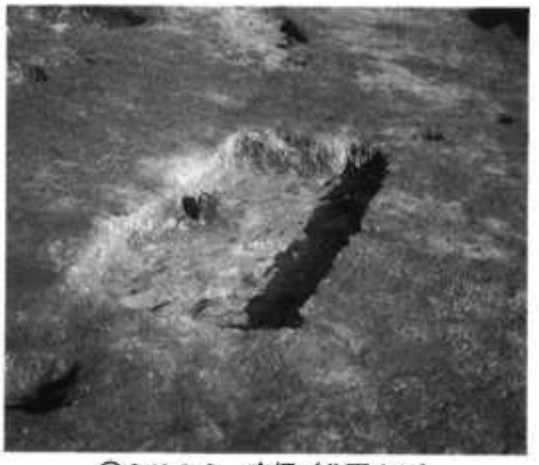
②ＳＫ１２　断面（南より）

③ＳＫ１４　完掘（南より）

④ＳＫ１５　断面（南より）

⑤ＳＫ１７　完掘（南より）

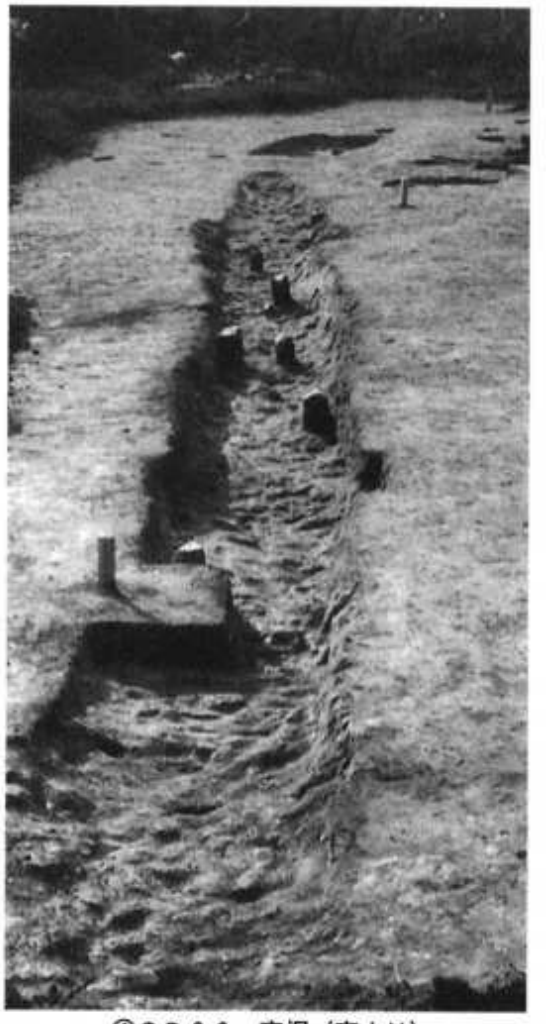
⑥ＳＫ１８　断面（南より）



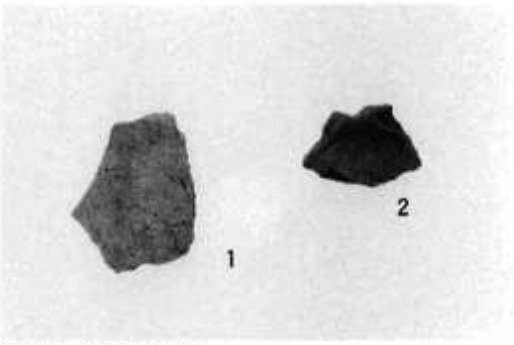
①ＳＫ１９　完掘（北西より）

②甕形土器出土状況（南西より）

③ＳＤ０１　完掘（東より）

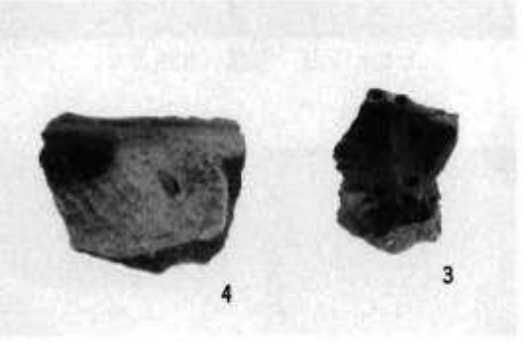


④ＳＤ０２　完掘（東より）



SI01出土遺物

SI03出土遺物(1)



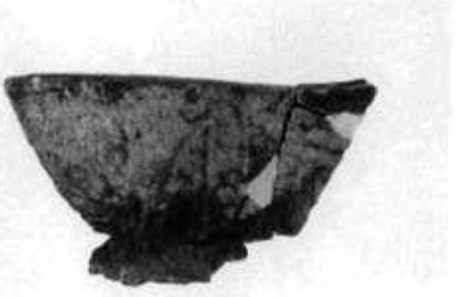
8

9

10

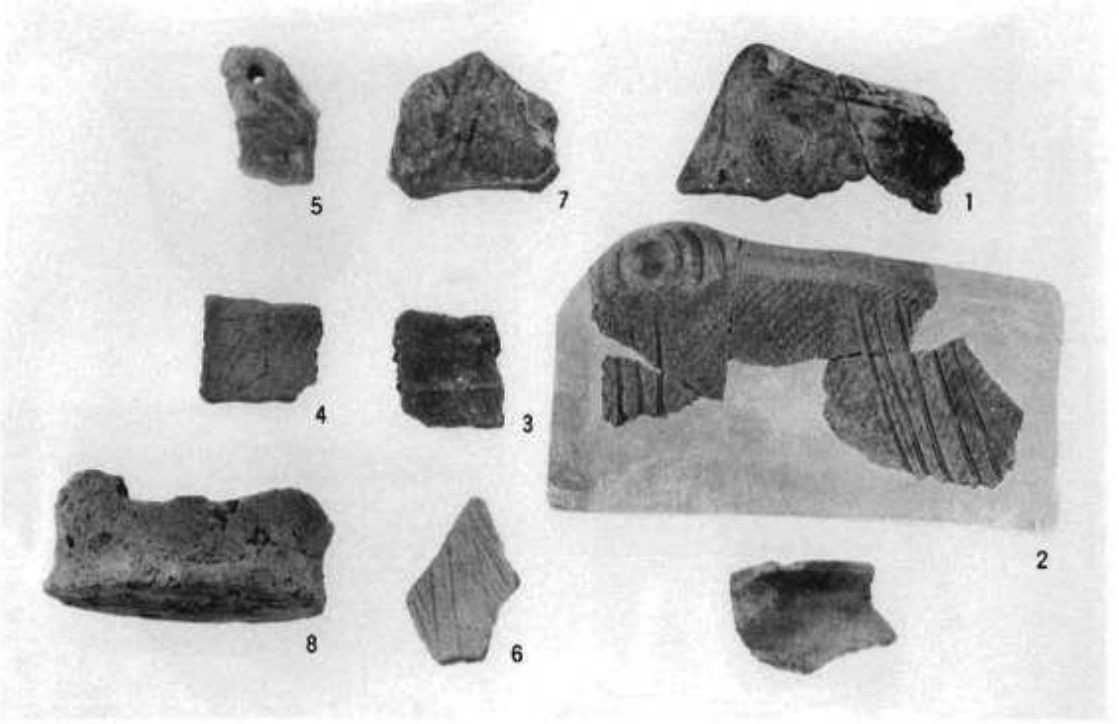
ＳＩ０３出土遺物(2)

11

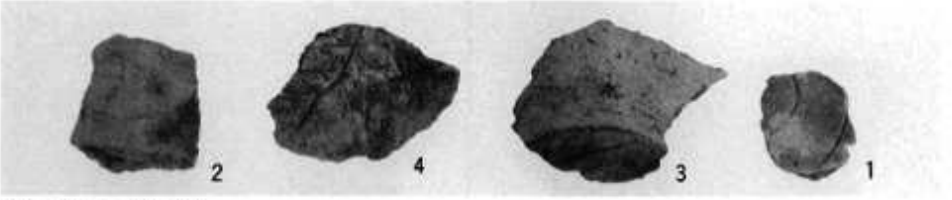


ＳＫ０４出土遺物

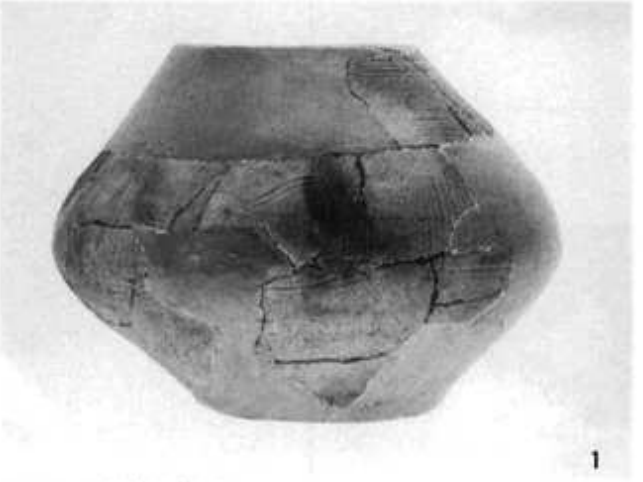
ＳＫ０７出土遺物



表土中遺物



ＳＩ０２出土遺物



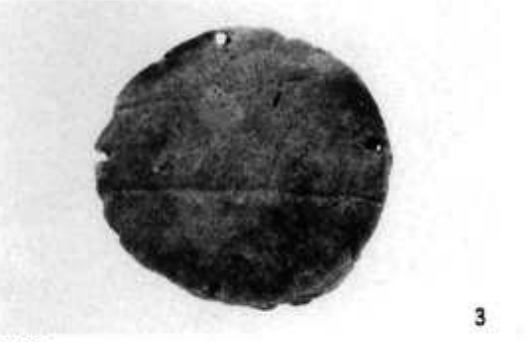
ＳＸ０１出土遺物(1)

ＳＸ０１出土遺物(2)

表採資料(1)

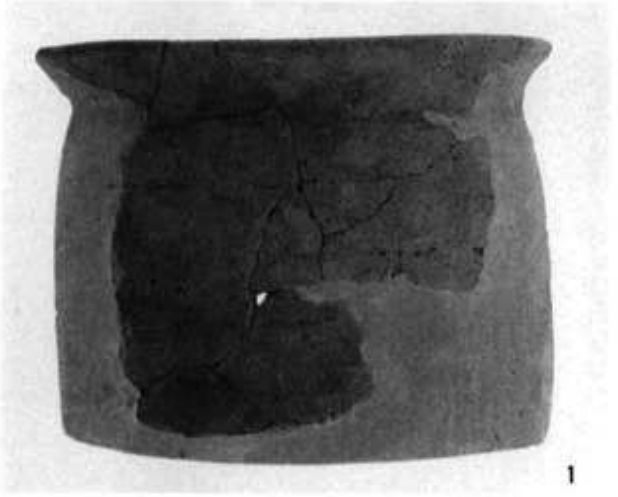
表側

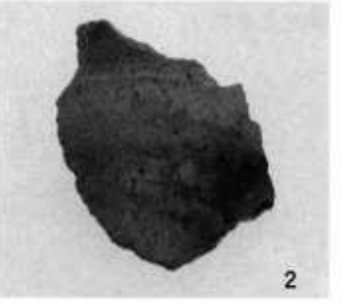
裏側



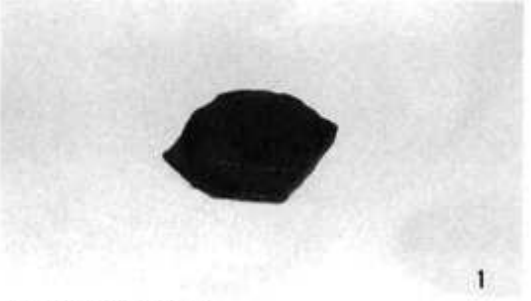
底部

表採資料(2)　　底部

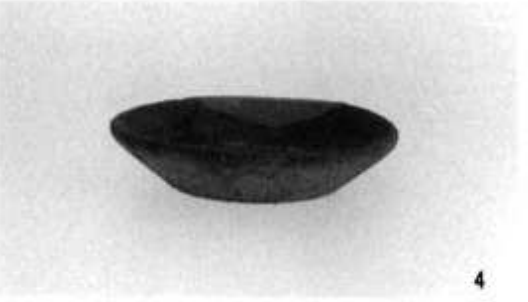




ＳＩ０４出土遺物



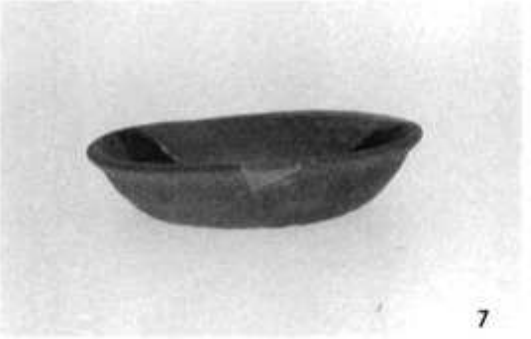
１号塚出土遺物(1)



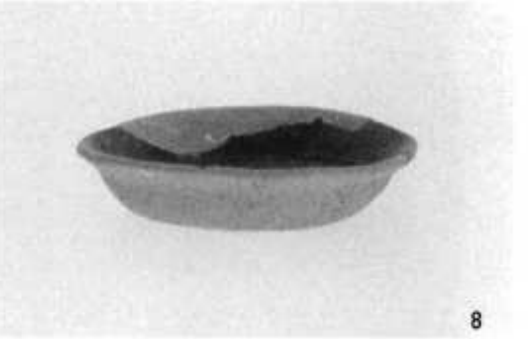
5

6

1号塚出土遺物(2)

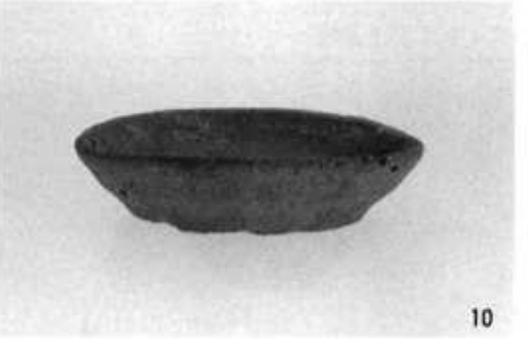


7



8

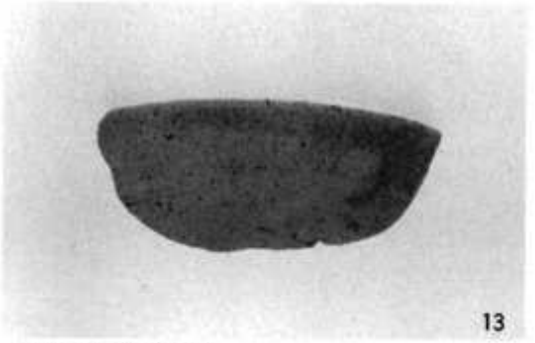
9



10

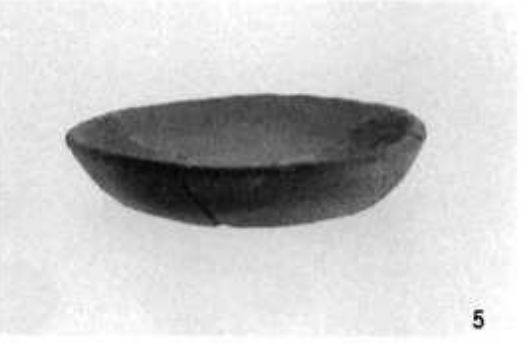
11

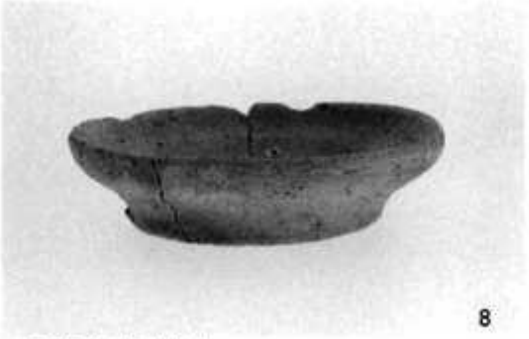
12



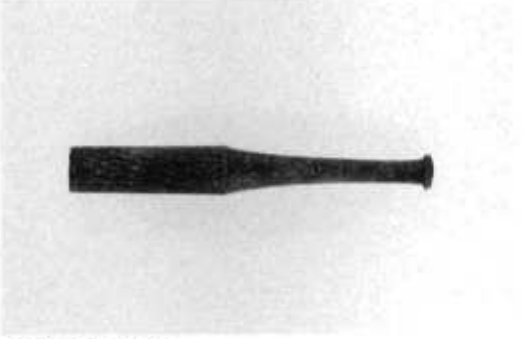
1 号塚出土遺物(3)

4 号塚出土遺物(1)

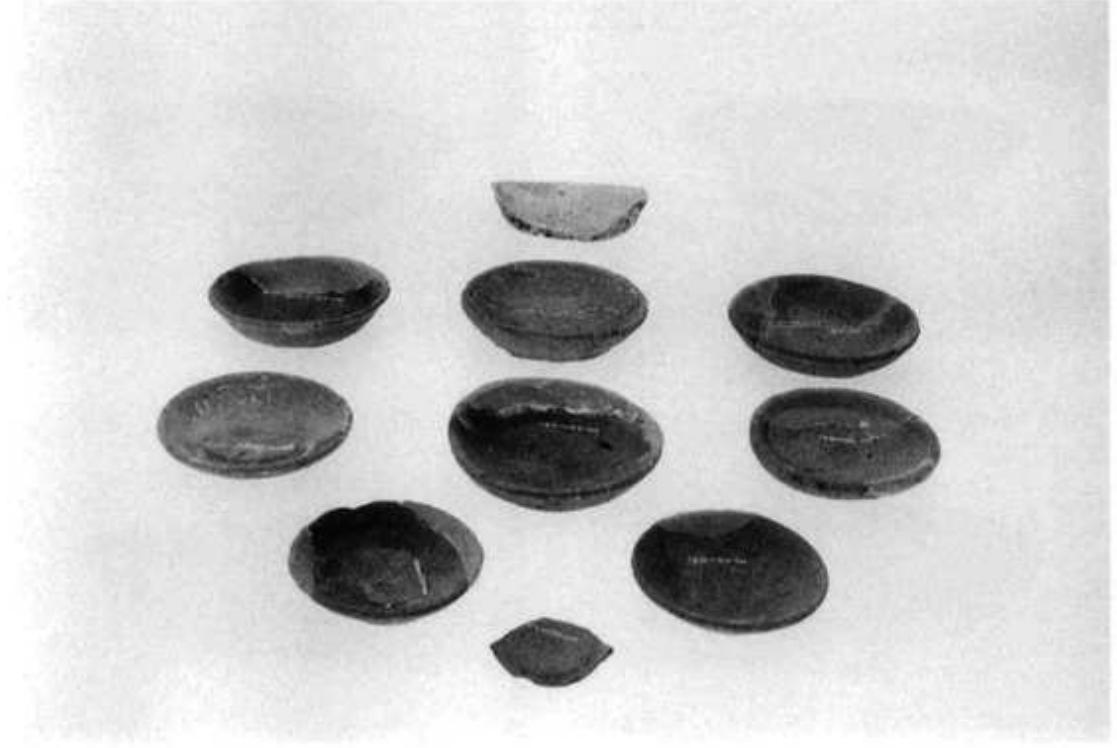




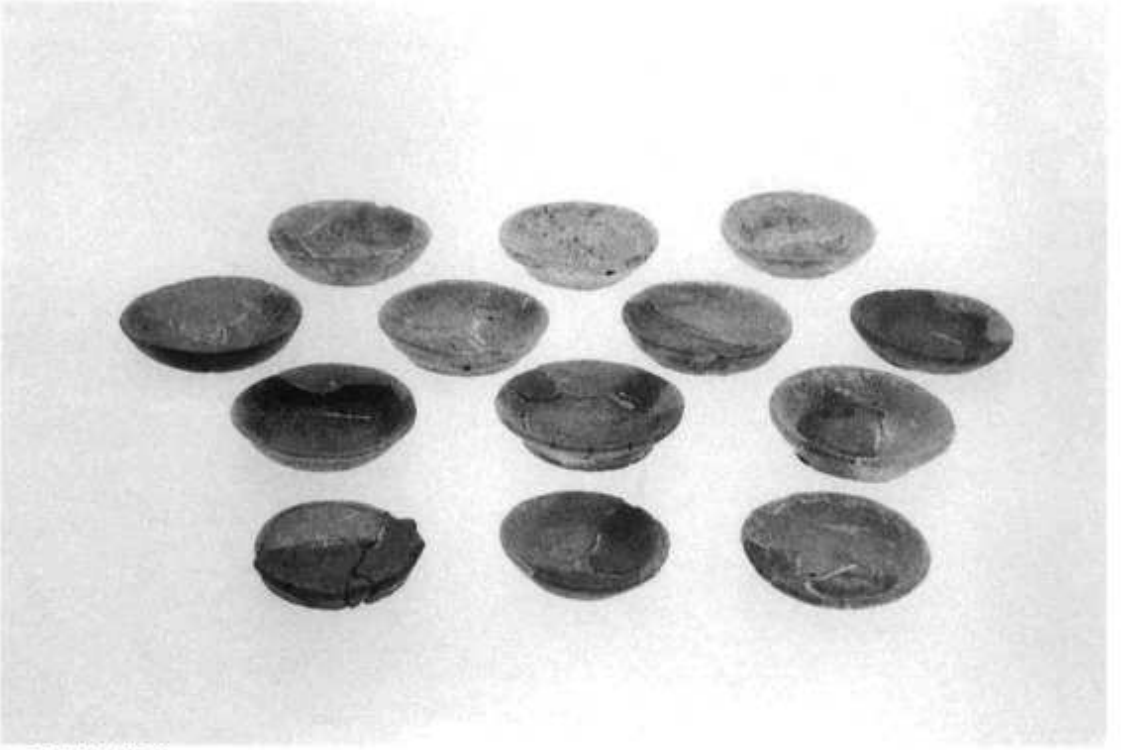
4 号塚出土遺物(2)



6 号塚出土遺物



1 号塚出土遺物



4 号塚出土遺物

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第36集
御城跡遺跡

平成6年3月発行

発行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭1－1－5）
TEL（0286）32－2764

印刷　㈱松井ピ・テ・オ印刷
（宇都宮市平出町4287－7）
TEL（0286）62－2511